増補 前橋の文化財

前橋市教育委員会

鉄造阿弥陀如来坐像

柔和な表情の阿弥陀仏

古代の栄華を

（総社）二子山古墳

語る二子塚

上野国内549社を合祀した明神様

総社神社

能装束 唐織

絢爛たる色彩美の能装束

下馬将軍の菩提寺龍海院

龍海院

春祭りでにぎわう鎮守の森

春日神社太々神楽

前橋の文化財

前橋市教育委員会

表紙題字：前橋市教育委員会教育長　早部賢一郎
表紙写真：神明宮の甲冑／江木の宝塔／十一面観
世音像（日輪寺）／中啓・伝狩野山楽筆

序

前橋は、歴史的価値の高い古墳が数多く残されており、東国文化発祥の地ともいわれています。この地は、古代から現代に至るまでの間、群馬地域の中枢として重要な役割を担ってきたため、先人の足跡は市内各地に残されており、さまざまな文化遺産が今日に伝えられています。これら文化財は、前橋の歴史を知る上で、そして私たちの生活をより豊かにする上で大切であり、いつまでも子孫に受け継いでいかなければならないものです。

本書は、市内に残る数々の文化財を訪ねて、先人を偲び、郷土の歴史と文化を、市民各位にご理解いただくために刊行したもので、昭和63年の「前橋の文化財」を増補改訂したものです。この10年の間、県指定文化財が３件、市指定文化財が28件増え、現在、国・県・市の指定文化財は169件をかぞえ、新たに登録文化財も４件加わりました。

市民の皆様には、このように多くの重要な文化財を有する郷土前橋への誇りと自信を持っていただき、併せて郷土への理解と愛情が一層深められることを期待いたします。

本書が、市民の皆様はもとより多くの方々に利用され、前橋の文化財に対する関心と愛護の気持ちを高めていただく一助になれば幸いです。

刊行にあたり、文化財の所有者・管理者、文化財調査委員をはじめご協力くださった関係各位に、心より敬意と謝意を表する次第であります。

平成11年２月１日

前橋市教育委員会

教育長　早　部　賢一郎

目次

口　絵
鉄造阿弥陀如来坐像
（総社）二子山古墳
総社神社
能装束　唐織
龍海院
春日神社太々神楽

序

前橋の歴史と文化財概観 …… 3

Ⅰ．天然記念物 ……11
1．岩神の飛石
2．前橋高等学校のラクウショウ
3．総社神社の社叢けやき
4．西大室公民館のオハツキイチョウ

Ⅱ．史　跡 ……17
5．(総社)二子山古墳
6．前二子古墳
7．中二子古墳
8．後二子古墳
9．(天川)二子山古墳
10．宝塔山古墳
11．八幡山古墳
12．蛇穴山古墳
13．前橋天神山古墳
14．荒砥富士山古墳
15．新田塚古墳
16．経塚古墳
17．オブ塚古墳
18．亀塚山古墳
19．今井神社古墳
20．塩原塚古墳
21．王山古墳
22．金冠塚古墳
23．不二山古墳
24．上野国分寺跡
25．山王塔跡
26．女　堀
27．力田遺愛碑
28．石田玄圭の墓
29．上泉郷蔵附上泉古文書
30．前橋藩主酒井氏歴代墓地
31．前橋城車橋門跡
32．下村善太郎の墓
33．本城氏の墓
34．秋元氏墓地
35．秋元氏歴代墓地
36．高須家墓地
37．二宮赤城神社社地

Ⅲ．考古資料 ……49
38．上野国山王廃寺塔心柱根巻石
39．土　偶
40．四神付飾土器
41.42．石製鴟尾
43．カロウト山古墳石棺
44．埴輪・踊る男子像
45．奈良三彩小壺

Ⅳ. 彫　刻 ……59
46. 鉄造阿弥陀如来坐像
47. 十一面観世音像
48. 納曽利面
49. 慈照院千手観音坐像
50. 無量寿寺地蔵菩薩立像
51. 無量寿寺十一面観音立像
52. 円満寺薬師如来坐像
53. 円満寺石造阿弥陀三尊坐像
54. 石造地蔵菩薩坐像
55. 小島田の阿弥陀如来坐像
56. 鳥羽の大日如来及び笠塔婆
57. 石造観音菩薩坐像

Ⅴ. 建造物 ……73
58. 上野総社神社本殿
59. 旧アメリカン・ボード宣教師館
60. 旧蚕糸試験場事務棟(前橋市蚕糸記念館)
61. 臨江閣本館・茶室
62. 産泰神社本殿幣殿拝殿神門境内地
63. 臨江閣別館・渡廊下
64. 大徳寺総門
65. 光厳寺薬医門
66. 旧関根家住宅
67. 総社神社拝殿
68. 廃覚動寺宝塔
69. 笠薬師塔婆
70. 小島田の供養碑
71. 阿弥陀三尊画像板碑
72. 東覚寺層塔
73. 前橋藩刑場跡供養塔ならびに道しるべ
74. 宝禅寺異型板碑
75. 山王の宝塔
76. 二宮赤城神社の宝塔
77. 普蔵寺供養塔
78. 富田の宝塔
79. 大福寺の宝塔
80. 観昌寺の宝塔
81. 江木の宝塔
82. 光厳寺の石幢
83. 亀里町阿内宿の石幢

Ⅵ. 工芸品 ……101
84. 脇差・銘直胤
85. 短刀・銘信国
86. 刀・銘清光
87. 刀・銘英義
88. 短刀・英義
89. 薙刀・銘英義
90. 太刀・銘長光
91. 太刀・銘景重
92. 妙安寺の梵鐘
93. 総社神社懸仏
94. 総社神社雲版
95. 中啓・伝狩野山楽筆
96. 東福寺鰐口
97. 大徳寺多宝塔
98. 産泰神社八陵鏡
99. 伯牙弾琴鏡
100. 二宮赤城神社梵鐘
101. 前橋藩主松平家奉納能装束一式
102. 前橋藩主松平家陣羽織
103. 前橋藩主松平家軍配
104. 徳蔵寺の懸仏
105. 神明宮の甲冑
106. 前橋藩家老小河原左宮の甲冑附旗差物
107. 光厳寺の打敷・油単並びに幡
108. 石山寺蒔絵机
109. 三具足一具
110. 輪口瓜形釜伝芦屋一口附極め書三通

Ⅶ. 書跡ならびに絵画 ……125
111. 後陽成天皇宸翰古歌御色紙
123. 絹本著色親鸞上人縁起絵伝

112. 後柏原天皇宸翰朗詠詩歌
113. 霊元天皇宸翰御懐紙
114. 総社本上野国神名帳
115. 絹本著色聖徳太子孝養像(六臣)
116. 絹本著色聖徳太子孝養像
117. 絹本著色親鸞上人旅姿像
118. 絹本著色親鸞・成然両上人像
119. 絹本著色親鸞上人像
120. 121. 122. 絹本著色成然上人像
124. 絹本著色真宗七高祖像
125. 絹本著色九文人合作書画
126. 絹本著色蓮如上人像
127. 絹本著色九字名号
128. 絹本著色十字名号
129. 麻本著色両界曼荼羅　一対
130. 日輪寺寛永の絵馬
131. 二宮赤城神社絵馬

Ⅷ. 歴史資料 ……147
132. 文政四年天川原村分間絵図
133. 文政四年前橋町絵図
134. 享保十五年天川町絵図
135. 典籍・前橋藩松平家記録
136. 書跡・豊臣秀吉和歌短冊
137. 松平藩主画像
138. 結城政勝画像
139. 酒井重忠画像
140. 八幡宮文書
141. 前橋祇園祭礼絵巻
142. 酒井家史料
143. 一谷山記録
144. 妙安寺筆録
145. 妙安寺古系図
146. 一谷山最頂院妙安寺縁起上・下
147. 唯信鈔(伝親鸞筆)
148. 唯信鈔文意(伝成然筆)
149. 葵紋幕付本多佐渡守正信奉書写
150. 親鸞寿像遷坐関係書状

Ⅸ. 無形文化財ならびに有形・無形民俗文化財 ……167
151. 下長磯あやつり式三番附人形3個
152. 上泉の獅子舞
153. 二之宮の式三番叟附伝授書
154. 駒形牛頭天王の獅子頭
155. 稲荷新田の薬師
156. 泉沢の人形附小道具等一括
157. 総社神社太々神楽
158. 野良犬獅子舞
159. 産泰神社太々神楽
160. 片貝神社太々神楽
161. 泉沢の獅子舞
162. 春日神社太々神楽
163. 稲荷藤節
164. 前橋鳶木遣り纏振り梯子乗り
165. 二宮赤城神社の御神幸
166. 総社神社の筒粥置炭式

Ⅹ. 登録文化財 ……185
1. 群馬県庁本庁舎
2. 群馬会館
3. 前橋市水道資料館
4. 前橋市浄水場配水塔

指定文化財等一覧表 ……191
所在地図 ……197
協力者・協力機関、執筆者、監修者 ……199
さくいん
あとがき

凡　例

1．本書は、前橋市内所在の国・県・市指定文化財等170件の写真を収録し、簡易な解説を加えたものです。

2．内容は、昭和63年12月１日発行の『前橋の文化財』の増補改訂版とし、その後新たに指定・登録された文化財を追加しました。

3．指定文化財の配列順は、種別ごとにまとめ、可能なかぎり国・県・市の順、指定年月日順を考慮して配列しました。

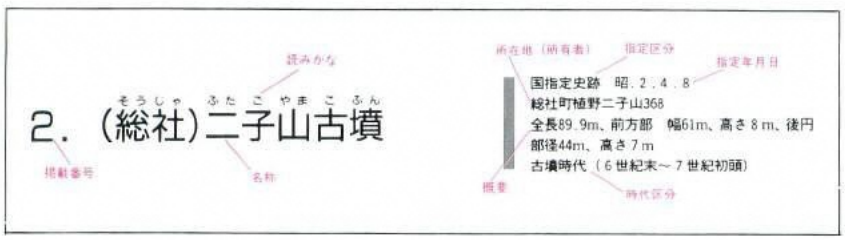
4．目次掲載の名称は、指定名称と若干異なるものもあります。指定名称については、指定文化財一覧表を参照して下さい。

5．見出しの時代区分は、文部省検定済中学校教科書に拠りました。

6．本書作成にあたって、指定文化財の所有者・管理者等ご協力をいただいた方々の氏名は末尾に明記させていただきました。

7．執筆および編集は、前橋市教育委員会文化財保護課で行いました。また、監修は前橋市文化財調査委員の方々にお願いしました。

8．見出し例



前橋の歴史
と
文化財概観

前橋市紋章

旧藩主松平氏の馬印の「輪貫」からとったもので明治42年に制定された。
（外径と内径の比１：0.73）

1．前橋の歴史と文化財概観

前橋市は関東平野の北西部にあたり、群馬県中心部よりやや南西に位置する。市の西側を南北に流れる利根川により、市内は二分されるが、「水と緑と詩の町」にふさわしい景観を生み出している。

地形でみると、利根川の西は榛名山の東の裾野にあたり、市街地から南東の地域は標高100m前後の平坦地で、前橋台地と呼ばれている。また、市の北西から南東に幅の広い低地帯があるが、ここは旧利根川の流域にあたり、広瀬川低地と呼ばれている。広瀬川低地の東は赤城山の南麓斜面にあたり、最北端は標高600mをこえる。

各地域とも今から約200万年前に始まった新生代第４紀に形成された堆積物が基盤岩盤の上を厚くおおっている。赤城山南麓斜面は、洪積世のはじめから激しく火山活動した赤城山の成層火砕岩層の上に関東ローム層が堆積し、開析によって形成された台地付近には古くから集落が発達した。他の地域は、数百メートルの厚さをもつ扇状地堆積物の上を泥流がおおう平坦地であり、とりわけ前橋台地は古代から近・現代にいたるまで群馬県の歴史の中核として発展した。「**岩神の飛石**」（昭和町）はカルデラ形成前の赤城山の山頂付近にあった岩塊が、火砕岩類の流れや前橋泥流の流れで現在の位置に至ったといわれる。

旧石器時代は、1946年の岩宿遺跡（新田郡笠懸町）の発見により、急速に調査が進み、全国から旧石器の出土が見られるようになった。前橋市内でも近年旧石器の出土例が増えている。内堀遺跡（西大室町）出土の約２万８千年前の石器や柳久保遺跡群（荒口・荒子町）出土の約２万３千年前のナイフ形石器、熊の穴II遺跡（西大室町）出土の約２万２千年前の石器などがその例である。内堀遺跡の旧石器は、長野県和田峠産の黒曜石を使うグループと県内産の石材を使うグループに分けられる。また、柳久保遺跡群頭無遺跡や鳥取福蔵寺遺跡（鳥取町））出土の約１万３千年前の細石器は、遠くシベリア方面から伝播した文化であると考えられ、この時代に大規模な文化交流のあったことがわかる。

約１万２千年前に最後の氷河期が終わると、日本列島は大陸から切り離され気候も徐々に温暖となってきた。この頃に土器が出現し、その表面の文様から名付けられた縄文時代が始まる。縄文時代は一般に狩猟、採集を中心にした生活の時代と言われ、小集落が中心と考えられてきたが、三原田遺跡（赤城村）、三内丸山遺跡（青森県）のような大規模遺跡も近年調査がなされ、従来とは異なる縄文時代観が生まれてきている。

市内では、端気遺跡群（端気町）や小島田八日市遺跡（小島田町）、徳丸仲田遺跡（徳丸町）で縄文時代草創期や早期の土器が検出されている。特に徳丸仲田遺跡は従来このような古い時期の遺跡はないと考えられていた地区であり、さらに古い時期の遺跡の発見が予想される。前期になると、芳賀団地遺跡群（嶺・鳥取・勝沢・小坂子町）、川白田遺跡（小坂子町）などで竪穴住居が発見され、この時期に赤城山南麓では遺跡の数が増えてくる。中期になると、芳賀団地遺跡群など（小神明・勝沢・小坂子町）、荒砥二之堰遺跡（飯土井町）で敷石住居や竪穴住居がみられる。後期・晩期では小神明遺跡群（小神明町）や大道遺跡（下大屋町）などで竪穴住居・配石墓などが発見されている。「**土偶**」（東京国立博物館）はこの時期のものである。

紀元前３世紀ころ縄文時代から弥生時代に入り、本格的な農耕社会が誕生し、市内では中期の小神明遺跡群（小神明町）や端気遺跡群（端気町）で竪穴住居や墓が発見されている。清里庚申塚遺跡（上青梨子町）や北三木堂遺跡（今井町）、日高遺跡（高崎市）、吉野ケ里遺跡（佐賀県）もこの時代である。清里庚申塚遺跡からは環濠集落が発見されている。従来は水田耕作の東日本へのひろがりは弥生時代中期からと言われていたが、近年の調査で、前期からかなりの早さで農耕文化が伝わったことがわかってきている。

4世紀に入り、東毛の利根川流域に新しい東海系土器(石田川式土器)を伴う文化が入ってくる。新しい古墳時代の始まりである。このころ市内では「**八幡山古墳**」(朝倉町)や「**前橋天神山古墳**」(広瀬町)が造られている。前橋天神山古墳には石田川式土器が並べられており、この新しい土器をもたらした人々と古墳造りの係わりを示している。埋葬主体部の粘土槨からは、銅鏡5面、銅鏃30本などの武器なども発見され、国の重要文化財となっている。この時代利根川流域は開発が進み、「毛野国」と呼ばれる一大勢力圏に成長して行く。昭和10年の調査によれば、群馬県内には古墳が8,423基あるとされている。これは全国有数の数である。現在多くが消滅してしまったが、市内には国指定史跡8基と県指定史跡2基、市指定史跡9基の古墳が残されている。

5世紀に入ると県内各地に古墳が造られて行く。「**今井神社古墳**」(今井町)もその一つである。こうした各地の古墳群の成立には、地域の豪族の存在がある。このころから6世紀末にかけて特色のある人物埴輪・器材埴輪が県内では非常に多く造られ、各地の博物館に展示されているものも多い。「**埴輪・踊る男子像**」(勝沢町)もその一例である。また、市内でも調査で見つかる竪穴住居の跡や水田の跡が増加する。市内で遺跡の調査の指標になるものの一つが火山灰である。県内では、4世紀前半の浅間山より降下のC軽石、6世紀初頭と中葉降下の榛名山二ツ岳が出来るときの噴火の火山灰や軽石であるFAとFP、1108年の浅間山より降下のB軽石などが、水田跡などより見つかり、遺跡の年代を判断する物差しになっている。

6世紀に入ると古墳に大きな変化が生まれる。横穴式石室への移行である。また、平野部を中心として全長70から100mほどの前方後円墳が、距離をおいて造られている。「**王山古墳**」(大渡町)、「**前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳・小二子古墳**」の大室4二子古墳(東・西大室町)、「**総社二子山古墳**」(総社町)、「**天川二子山古墳**」(文京町)などが、それにあたる。これらの古墳の石室には、豪華な副葬品があり、「**四神付飾土器**」(中央公民館展示)のような装飾器台を含めた土器・武具類が出土した前二子古墳にその一端をかいま見ることが出来る。また、これらの出土品や群馬県の古墳は、幕末から明治にかけて活躍したイギリスの外交官アーネスト・サトウにより、広く海外にも紹介されている。

7世紀に入ると、、総社古墳群を中心に大型の古墳が造られてくる。ここには、大型の方墳が3基残されている。愛宕山古墳、「**宝塔山古墳**」・「**蛇穴山古墳**」(総社町)である。愛宕山古墳には家形石棺があり、宝塔山古墳は截石切組積石室に家形石棺があり、石室の壁には漆喰が塗られていた。また、蛇穴山古墳の截石切組積石室は、高い石材の加工技術で造られている。このことから、この古墳の主は大和政権と密接に結びついた上毛野地方の中心豪族と考えられる。

この総社古墳群の西にある古代寺院が山王廃寺である。県内でも最古の寺院で、7世紀の中頃から後半にかけて創建され、11世紀前後まで存続したといわれる。寺域からは、全国で数少ない「**石製鴟尾**」、東西3m南北2.5mの塔心礎を持つ「**山王塔跡**」、全国で唯一の「**上野国山王廃寺塔心柱根巻石**」(総社町)、塑像頭部、緑釉陶器などが見つかっている。寺の正式名称については、調査で発見された瓦のヘラ書きから「放光寺」であり、「山の上碑」(高崎市)にある放光寺とみられる。また、先年の調査で大量の瓦と塑像片などが出土した。塑像片からは大小の塑像群があることがわかった。

この山王廃寺を建立した豪族は、石造加工技術の共通性から、総社古墳群を造った豪族ではないかと言われる。

山王廃寺の創建された頃の大化二年(646)に「改新の詔」が出され、新しい国造りが始

まった。公地公民制が実施され、国・郡・里の行政制度が設けられた。律令制度が整えられ、地方支配の拠点である国府の建設がすすめられた。東国では8世紀のはじめには建設が始められたと言われる。また、荒子町の上西原遺跡からは、勢多郡衙とみられる跡が見つかっており、行政制度が整備されてきたことがわかる。国府の所在地は、現在の元総社町の総社神社を含む一帯と考えられているが、この一帯は中世の蒼海城の造成がなされ、国府の明確な状況はわかっていない。近年の調査で、「国厨」「曹司」と書かれた墨書土器や人形、斎串などか発見されており、この地区での所在がさらに明確になった。

現在の「**上野総社神社本殿**」・「**総社神社拝殿**」（元総社町）は江戸時代に再建されたものであるが、元は西北約500mの地点にあり、平安時代に国司が上野国の神社549社を集めて祀ったのがはじめである。

神社には「**総社本上野国神名帳**」（元総社町）があり、549社を14郡別に記してある。また、神社には安土・桃山時代の「**総社神社懸仏**」が残り、「**総社神社の社叢けやき**」も指定になっている。なお、「**総社神社の筒粥置炭式**」は古代の信仰の形を伝えるものとして重要である。

国府がその機能を発揮し始めた741年「国分寺建立の詔」が出され、上野国でも建設が進められた。749年に上毛野朝臣足人が、国分寺建立に功績があったとして位を与えられており、国分寺がほぼ建立がおわったようである。また、建立には地方豪族の力が必要だったことがわかる。「**上野国分寺跡**」（元総社町、群馬町）は、塔跡、金堂跡に礎石が残るのみであったが、発掘調査の結果をもとに、整備が進められている。

昭和56年に上泉町の檜峯遺跡から、奈良時代の「**奈良三彩小壷**」（中央公民館展示）が発見された。緑、白、黄褐色の三色の釉が配色されており、畿内で焼成されたと思われ、中央との文化のつながりを示す遺物である。

また、本町の八幡宮に保管されている「**伯牙弾琴鏡**」（本町）は、八幡宮境内の古墳から出土したと言われる鏡で、琴の名人の伯牙の故事を題材とした文様が鋳出されている。794年に、都が平安京に移され、時代の様相が変わってくる。800年に富士山の噴火があり、806年に天台宗が公認される。天台宗の祖「最澄」は817年に上野国に下り、天台宗を広めている。また、818年には坂東諸国に大地震があり、各地に地割れがおこった。内堀遺跡（西大室町）や中原遺跡群（上増田町）でもその地割れが発見されている。また、中原遺跡では大地震の際の洪水で埋まった水田が発見された。これは、条里制施行時に近い時期の水田として、重要な遺跡である。

10世紀に入ると律令体制は崩れはじめ、地方の武士団が力をつけてくる。935年に下総で兵をあげた平将門が、939年に上野国府を襲っている。

芳賀東部団地での調査成果によれば、9世紀に入ると竪穴住居が8世紀に比べ急増する。しかし、10世紀の後半になると、竪穴住居の数は激減し、11世紀にはさらに減少する。　この変化も、上野国の動乱に関係があると考えられる。

平安時代後期の不安な世相のなかで、現世利益の観音信仰の高まりにより「**十一面観世音像**」（日輪寺町）や「**無量寿寺十一面観音立像**」（二之宮町）が造られている。また、この時代の和風化の現れが「**産泰神社八稜鏡**」（下大屋町）である。

1108年浅間山が大噴火をおこし、大量の灰と砂（B軽石）を降らせた。県内の田畑は、灰と砂に埋もれ、田の多くは放置されるか、土を盛って畑に変わり、放置された田畑は荒れ地として再開発され、荘園となっていった。

また、荘園拡大のなかで、用水路として「**女堀**」（富田・二之宮・飯土井町・赤堀町など）

が計画され、工事が進んだ。未完成におわったものの、前橋市上泉町の旧利根川から引水し、佐波郡東村西国定までの12kmをつなぐ壮大な計画であり、調査結果によれば、高い工事技術がうかがわれる。

12世紀以降、国司政治、律令体制は衰退し、県内の南や東に荘園が増え、そこを苗字とする武士団が急成長する。平将門の乱を平定した藤原秀郷の流れをくむ兼行が淵名氏として淵名に拠点をもち、淵名氏から大胡氏、大室氏、山上氏、那波氏、藤姓足利氏などがうまれている。 女堀は、女堀の起点・通過点・終末点に勢力をもっていた秀郷流藤原氏が総力をあげて淵名荘への通水のため取り組んだものといえる。

このころ、さらに、神社・寺院の領有地である御厨が増え、国司支配の国衙領をせばめていった。市内にも伊勢神宮の御厨の細井御厨や青柳御厨があった。

12世紀後半、都での保元・平治の乱など、源平の武士による争乱が続くなか、1180年伊豆で源頼朝が挙兵し、時代は大きくかわっていった。

当初、頼朝方に組みした上野国の武士は少なく、藤姓足利氏の足利忠綱は源頼政を宇治川で破り、上野国府周辺の源氏方の集落を焼き払っている。また、上野国一円に一族の広がる有力豪族の新田義重は「自立の志」を示していたが、1183年の下野国（栃木）野木宮合戦で足利忠綱が破れ、上野の武士は頼朝の支配下に入る。しかし、当初の状況から幕府内で重要な地位にはつけなかった。

上野国は安達盛長が国奉行人となり、以後安達氏が上野守護となった。安達氏が1285年の霜月騒動で滅亡した後は、上野国は得宗領（北条氏本宗家領）となる。

このような、時代の大きな変化は宗教にも大きな影響を与えた。鎌倉新仏教が急速にその勢力を広げ、貴族・武士・庶民に至る広い信者を得ていった。平安時代末からの末法思想による極楽浄土を願う阿弥陀信仰の広がりは、仁治四年（1243）の銘のある類例の少ない鉄造（頭部と手は青銅製）の「**鉄造阿弥陀如来坐像**」（端気町）を造立し、阿弥陀信仰が普及し、「**円満寺石造阿弥陀三尊坐像**」（後閑町）、仏画が刻まれた「**阿弥陀三尊画像板碑**」（公田町）、県内最古の在銘（仁治元年1240年）の「**小島田の供養碑**」（小島田町）などが造立された。阿弥陀三尊画像板碑のある乗明院は、新田氏の氏寺長楽寺の末寺であり、寺は周りに濠を巡らした環濠屋敷となっている。長楽寺は武士に広まった禅宗の一派臨済宗の開祖栄西の弟子栄朝により建立された寺である。

このころ、浄土真宗を興した親鸞は常陸の国稲田を拠点に布教をしているが、弟子の成然は親鸞が帰洛する際に関東での布教を命ぜられ、親鸞自作の寿像と九字名号、妙安寺の寺号などを授かったという。成然の創建した妙安寺は、天正十八年に川越に入った酒井重忠の母が親鸞木像に信仰をもったため川越に移り、さらに重忠が前橋に転封となると川越から前橋に移った。寺には「**唯信鈔（伝親鸞筆）**」・「**唯信鈔文意（伝成然筆）**」（千代田町）という貴重な鎌倉期の文書をはじめとする寺宝がある。

また、鎌倉時代の仏像として「**無量寿寺地蔵菩薩立像**」（二之宮町）や二之宮赤城神社本地仏と考えられる「**慈照院千手観音坐像**」（二之宮町）、長楽寺末寺円満寺の「**円満寺薬師如来坐像**」（後閑町）、「**鳥羽の大日如来及び笠塔婆**」（鳥羽町）も残っている。

13世紀後半、幕府は元寇（文永・弘安の役）を乗り切り、霜月騒動で有力御家人である安達氏を滅ぼし、その専制支配を強めていった。その支配に対する不満は14世紀に入ると増大し、朝廷の動きも活発化し、各地で倒幕の機運が高まってきた。

1333年に新田義貞が鎌倉を攻めて、北条氏を滅ぼすと、新田氏と足利氏の争いとなり、足利氏が勝利して、上野国は守護に上杉憲房が任命され、長尾氏が守護代となる。

長尾氏は総社・白井・鎌倉・越後の四家に別れ、関東管領の上杉氏にかわって実質的な支配を行った。総社長尾氏は国府跡地である地に広大な蒼海城を築いた。

15世紀に入ると幕府と鎌倉府とは決裂をみせ、永享の乱・結城合戦を経て享徳の合戦になり、上杉氏の領国体制は崩れてゆく。1561年、越後の長尾景虎は上杉の姓を譲り受け、上杉政虎（謙信）として厩橋城を拠点として関東に進出し、上野国は激しい戦乱の時を迎える。1566年、武田信玄は箕輪城を攻略し、厩橋の謙信と対立した。その後小田原北条氏が厩橋城を落とし、上野国一帯に勢力を伸ばし、豊臣秀吉と対立をする。1590年に小田原が落城すると、上野国の戦乱の時は終了する。

旧利根川が今の流路を通るようになったのは、天仁元年（1108）の噴火による洪水で流路が南に移動し、今の広瀬川付近になり、応永三十四年（1427）の洪水を端緒とし、西に移動して現在の位置になり後に広がったとみられる。

この時期を示す文化財としては、環濠の残る「**二宮赤城神社社地**」（二之宮町）やその二宮赤城神社にある舞楽面の「**納曽利面**」（二之宮町）、徳蔵寺の「**麻本著色両界曼荼羅１対**」と「**徳蔵寺の懸仏３面**」（元総社町）がある。また、「**東福寺鰐口**」は元は赤城山地蔵岳山頂の地蔵堂にあった物で、赤城信仰を知ることが出来る。

二宮赤城神社は、「延喜式」にある上野十二社のうちの大社三社のうちの一つで、中世には赤城信仰の中心をなしていたとみられる。また、境内には塔跡や江戸時代の「**二宮赤城神社梵鐘**」、「**二宮赤城神社絵馬**」がある。梵鐘は三夜沢赤城神社との間の「**二宮赤城神社の御神幸**」と呼ばれる行事の時に鳴らされる。絵馬は、大胡城主牧野氏が大坂夏の陣の際に、戦勝を祈願して奉納したといわれる。

赤城山南麓には「赤城塔」と呼ばれる宝塔が多く見られる。南北朝から室町時代にかけて造られた物で、「**二宮赤城神社の宝塔**」（二之宮町）、「**山王の宝塔**」（山王町）、「**江木の宝塔**」（江木町）、「**富田の宝塔**」（富田町）、「**大福寺の宝塔**」（鳥羽町）などがある。

この他、この時期の宝塔としては、「**東覚寺層塔**」（総社町）、異型板碑の「**普蔵寺供養塔**」（東大室町）や「**宝禅寺異型板碑**」（上泉町）、輪廻思想を表した「**光巌寺の石幢**」（総社町）、「**亀里町阿内宿の石幢**」（亀里町）などがある。なかでも永和四年（1378）の銘のある「**廃覚動寺宝塔**」（公田町）は見事である。

このような戦乱の時期に現世利益を求める民衆信仰の現れが、「**石造観音菩薩坐像**」（田口町）や「**稲荷新田の薬師**」（稲荷新田町）であり、来世を託したのが「**小島田の阿弥陀如来坐像**」（小島田町）や「**石造地蔵菩薩坐像**」（総社町）である。

1590年、徳川家康が関東に入ると厩橋城には平岩親吉を置き三万三千石を与えた。また、蒼海城には諏訪氏が配置された。1601年関ヶ原の合戦の功ににより、秋元長朝が父景朝のゆかりの地である総社領七千石を受け、翌年総社城を築いた。また、越後への街道にそって城下町を整備した。この地割りは今も残っている。この地は水利の便が悪く、領民が苦しんでいたため、1604年城の用水確保を兼ねて天狗岩用水を開削した。この用水建設は難事業で、大岩を取り除くのに山伏風の男が現れ岩を割り用水を通すことが出来たという。この男が天狗に違いないといわれ、羽階大権現として祀り、用水もその名に由来する。総社町の光巌寺は長朝が菩提寺として建立した寺で、境内にはのちに用水建設をたたえる「**力田遺愛碑**」（総社町）が地元の人々により建てられた。寺の東方の宝塔山古墳の上には「**秋元氏歴代墓地**」（総社町）がある。寺には秋元氏ゆかりの品が多く残されている。「**光巌寺の打敷・油単並びに幡**」（総社町）は秋元氏奉納の打ち掛けなどを仕立てなおした物で、「**石山寺蒔絵机**」・「**三具足一具**」・「**輪口瓜形釜伝芦屋一口附極め書３通**」（総社町）も秋元氏奉

納の品である。さらに、「**光巌寺薬医門**」（総社町）も残されている。総社町の元景寺は、長朝が父景朝の菩提を弔うために建立した寺で、「**秋元氏墓地**」（総社町）に父景朝ほか3基の墓がある。

秋元氏は寛永十年甲州谷村に転封となり、総社領は安藤氏の領地になる。その安藤氏は領民に重税を課し、総社騒動となり、江戸への越訴となるが、当時としては異例の農民側の勝利となる。それには、旧領主の秋元氏の助力があったと言われる。

関ヶ原で家康が勝利した翌年の1601年川越藩主の酒井重忠が前橋藩主となり、酒井氏は以後9代の忠恭まで藩主として活躍をする。紅雲町の龍海院は、酒井氏の菩提寺で「**前橋藩主酒井氏歴代墓地**」（紅雲町）があり、初代重忠から15代の忠顕までの墓石がある。源英寺には初代の「**酒井重忠画像**」（大手町）があるが、2代・4代の忠世、忠清は老中・大老として創業期の幕政の中枢にあった。2代の忠世は城下町の整備を行い、城の出入り口の柳原口に源英寺、石川口に龍海院を配して非常時の拠点とした。また、城下町の外側に寺を並べて防衛線とした。さらに、城下繁栄のため商人頭木嶋氏を置き市を開いた。　特に忠清は大老在任15年に及び、その権勢は江戸屋敷の位置から「下馬将軍」と呼ばれた。忠清失脚後、子の忠挙は藩政に専念し、藩校「好古堂」を創設し、災害に備え社倉を制定するなど、名君と呼ばれ藩政に治績を残している。酒井氏の政務資料として「**酒井家史料**」（大手町）が残されている。また、「**八幡宮文書**」（本町）には1571年の北条氏から1649年の酒井忠清までの文書があり、前橋を支配した領主との関係がうかがえる。なお、八幡宮文書や一谷山記録から、忠清の頃の慶安年中（1648―1651）ころに「厩橋」から「前橋」にかわったと考えられる。

初代重忠の時、徳川家康は本願寺の勢力を押さえるために東本願寺を建立する。その折りに妙安寺（千代田町）所有の親鸞自作の寿像を東本願寺にと要請があり、家康、重忠等の仲介で像は1603年正月に本山御影堂に納めた。このときの恩賞として辻ヶ花染の「**葵紋幕付本多佐渡守正信奉書写**」・「**書跡・豊臣秀吉和歌短冊**」などが妙安寺に与えられた。寺には「**一谷山記録**」・「**妙安寺筆録**」等の資料や「**後柏原天皇宸翰朗詠詩歌**」などの書跡、「**絹本著色親鸞上人像**」・「**絹本著色聖徳太子孝養像**」・「**絹本著色親鸞上人縁起絵伝**」等の絵画、「**中啓・伝狩野山楽筆**」・「**妙安寺の梵鐘**」等の工芸品がある。

元和八年、出羽国の最上氏が所領没収され、家臣の本城氏が2代忠世に「最上衆」として召し抱えられた。その「**本城氏の墓**」（紅雲町）が長昌寺に残る。

酒井家に代々家老としてつとめていたのが高須家である。特に5代の高須隼人は沼田領内の再検地を行ったが、その検地は「お助け縄」として感謝されている。正幸寺に「**高須家墓地**」（三河町）が残る。

17世紀末、元禄期になると貨幣経済が発展し、諸藩は支出増加による財政危機に直面する。さらに飢饉や風水害、利根川の洪水による城の浸食は激しく、1749年酒井氏は姫路に転封となった。転封に際して神明宮に寄付された「**神明宮の甲冑（紺糸威三枚胴具足）**」が今に残されている。

1749年に姫路から入城した松平氏は、転封の多い大名で借財も多かった。前橋入城後も宝暦の大洪水や明和の大火があり、在城19年で前橋城を放棄して1767年川越城に転封となり、その後100年間ほど分領として陣屋支配をうけることになった。

前橋城は慶応三年（1867）に再築されるが、その跡は県庁まわりの土塁と「**前橋城車橋門跡**」（大手町）などに見ることかできる。車橋門は新旧同位置にある。この再築前橋城の造りには、五稜郭に見られるような近代築城術の技法がみられる。

松平氏初代の直基により建立された孝顕寺には、「**松平藩主画像**」（朝日町）と松平氏がその正系を継いでいる結城氏の「**結城政勝画像**」（朝日町）が残されている。

川越藩（前橋藩）に刀工藤枝英義がいた。作には「**刀・銘英義**」、「**短刀・銘英義**」、「**薙刀・銘英義**」などがある。

前橋を治めた松平氏の様子は、元禄二年から明治二年まで記録された「**典籍・前橋藩松平家記録**」があり、大手町の東照宮に納められた「**前橋藩主松平家奉納能装束一式**」、「**前橋藩主松平家陣羽織**」、「**前橋藩主松平家軍配**」に見ることができる。

また、「**前橋藩刑場跡供養塔ならびに道しるべ**」が天川大島町にあり、民衆の心を知ることができる。日輪寺には初期絵馬の姿を伝える「**日輪寺寛永の絵馬**」があるが、馬が夜毎に抜け出して田畑を荒らすので、手綱をつけたとの伝説がある。

当時、医師、学者として活躍したのが、石田玄圭で「**石田玄圭の墓**」は高井町に残る。

天明三年（1783）浅間山が大噴火を起こし、火砕流や土石流が吾妻川から利根川を流れ下り、県内には灰が多量に降り積もった。これが引き金となり、冷害と凶作が起こった。藩主のいなくなった前橋の町はさびれ、農村の疲弊もすすんだ。

江戸時代の中頃から、大都市江戸への商品供給の活動が活発になってきた。商品生産の活動は、農村を貨幣経済に変え、農村を大きく変えていった。特に上州で盛んになったのが生糸・絹織物生産である。その生産の中心となったのが農家の女性であり、働き者としての「かかあ天下」の名前が生まれた。その養蚕農家の例が「**旧関根家住宅**」（西大室町）で、赤城南麓に多い「赤城型民家」である。飯土井町にあったが、大室公園内に復原・公開されている。

前橋藩でも有志による「永続金」という農村振興を目的とした貸付金制度が文政年間に始まった。この制度は幕末まで続いたが、天保年間からの農村人口の増加や荒れ地解消に効果があったという。「**上泉郷蔵附上泉古文書**」（上泉町）も年貢米の貯蔵やのちには飢饉への備蓄に使われた。その様子は上泉古文書に詳しい。

江戸時代の前橋を描いたものには、「**文政四年前橋町絵図**」（文京町）、「**文政四年天川原村分間絵図**」（文京町）、「**享保十五年天川町絵図**」（文京町）等がある。また、町のにぎわいは「**前橋祇園祭礼絵巻**」（大手町）２巻に表されている。

小相木町の大徳寺には、「**大徳寺総門**」と「**大徳寺多宝塔**」があり、いずれも正徳二年（1712）の建立と奉納されたものである。この大徳寺は利根川の「実正の渡し」に近いところにある。市内の利根川には橋がなく、渡船での渡しがあったが、例外が大渡にあった「萬代橋」である。安政五年に完成し、錦絵にもなったが、洪水で流出した。

下大屋町の産泰神社は古代にその創建がさかのぼるが、今の「**産泰神社本殿・幣殿・拝殿・神門及び境内地（建造物）**」は本殿が宝暦十三年（1763）、拝殿が文化九年（1812）、神門が天保四年（1838）につくられたものである。この産泰神社は安産守護の神として信仰され、かつては「産泰講」で関東一円から代参者が来ていた。

幕末、前橋藩は勤王か佐幕かその去就に迷っていた。その前橋藩の富津（千葉県）の陣屋に江戸を脱走した佐幕派の一団が迫り、武器・食料を要求した。陣屋の総督であった家老の小河原左宮はやむなく陣屋をあけわたし、責任をとって自刃した。その「**前橋藩家老小河原左宮の甲冑附旗差物（紺糸威二枚胴具足）**」（荒牧町）が今に残る。

明治の前橋を支えたのは、幕末から盛んになった生糸貿易である。再築前橋城建設の資金ともなり、貿易をしていた生糸商人はその財力で県庁誘致を成し遂げた。その中心人物が初代市長の下村善太郎で、「**下村善太郎の墓**」（紅雲町）は龍海院に残る。

また、製糸業の一大都市となった前橋には、明治四十五年に国立原蚕種製造所前橋支部がおかれた。その建物「**旧蚕糸試験場事務棟（前橋市蚕糸記念館）**」（敷島町）は今敷島公園内に移築されており、養蚕・製糸の資料が展示されている。前橋は日本で最初の器械製糸が始まった地であり、製糸業が前橋の経済を支えてきた。

明治九年二次群馬県の初代県令として前橋市発展に貢献した人物が、楫取素彦である。前橋への県庁決定、中学校・医学校建設、文化財の調査・修理、生糸の輸出振興に功績があった。特に教育には力をいれ、全国を上回る就学率であった。その楫取素彦の退任にあたり、迎賓館として、有志と費用を出し合って造ったのが「**臨江閣本館・茶室**」（大手町）である。また、隣の「**臨江閣別館・渡廊下**」（大手町）は明治四十三年の一府十四県連合共進会の貴賓館として建てられたもので、今も市民に活用されている。

群馬県人は新しい文化技術の受け入れに積極的であるが、キリスト教も早くに広まった。「**旧アメリカン・ボード宣教師館**」（小屋原町）はそれを示す建物である。また、群馬県は教育先進県としても知られたが、その資料は教育資料館（岩神町）に展示されている。

大正デモクラシーの時代に前橋は近代詩に名をなした詩人が多く生まれた。萩原朔太郎・萩原恭次郎・高橋元吉・平井晩村らで、その資料は千代田町の広瀬川沿いにある「前橋文学館」に展示されている。

昭和二十年八月五日前橋は大空襲を受け、市内の大半が焼失した。戦後の昭和二十二年のカスリン台風で前橋市は再び大きな被害を受けたが、その後着実に再生してきた。「前橋競輪」もその大きな収益で市政に貢献してきた。市街地はその後区画整理や土地改良で整備され、道路網の整備、住宅団地・工業団地の整備、公園整備も進み、「水と緑と詩のまち」にふさわしい福祉都市へと成長を続けている。市域もその後周辺の市町村を合併し現在の市域となっている。また、広域圏での活動も盛んになってきている。

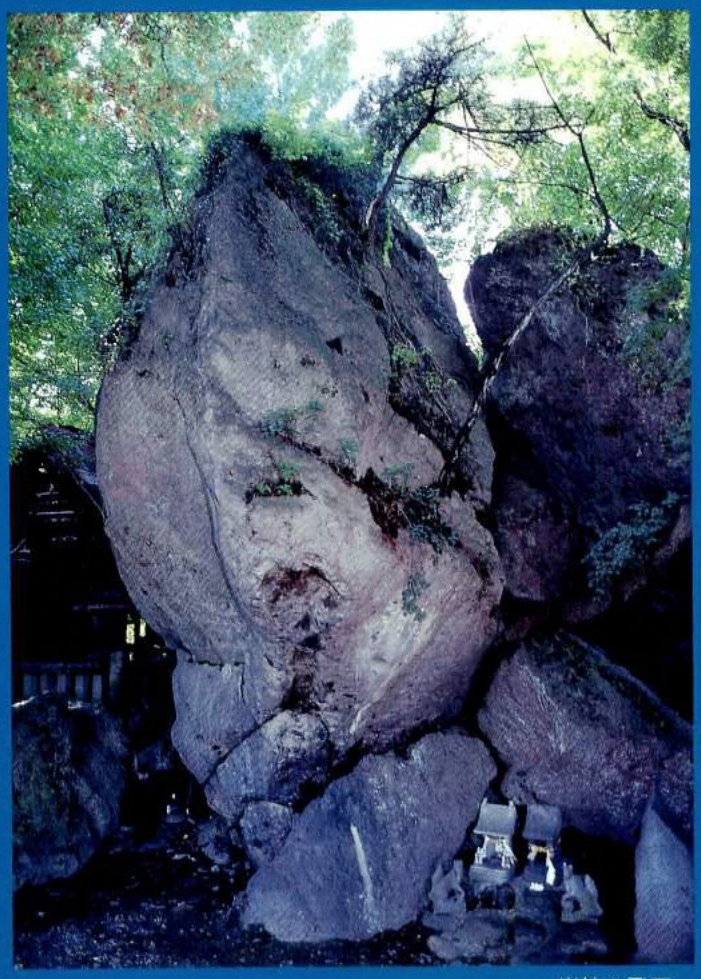
現在市内には、民俗文化財として神楽・獅子舞などが伝承されている。神楽には「**総社神社太々神楽**」・「**産泰神社太々神楽**」・「**片貝神社太々神楽**」・「**春日神社太々神楽**」があり、獅子舞には「**上泉の獅子舞**」・「**野良犬の獅子舞**」・「**泉沢の獅子舞**」と「**駒形午頭天王の獅子頭**」が、その他として「**下長磯あやつり式三番附人形３個**」・「**二之宮の式三番叟附伝授書**」・「**稲荷藤節**」が、他に「**泉沢の人形附小道具等一括**」・「**前橋鳶木遣り、纏振り、梯子乗り**」がある。

また、天然記念物として、「**前橋高等学校のラクウショウ**」・「**西大室町公民館のオハツキイチョウ**」がある。

文化財の中に、厳密な保存のための指定文化財の外に、ゆるやかに守り、活用を考えた「登録有形文化財」もある。市内では「**群馬県庁本庁舎**」（大手町）・「**群馬会館**」（大手町）・「**前橋市水道資料館（旧浄水構場事務所）**」（敷島町）・「**前橋市浄水場配水塔**」（敷島町）が登録され、活用されている。

まもなく来る二十一世紀がどのような時代になるか、過去の歴史と文化財をもう一度見つめ直すことが必要な時期になっているのではなかろうか。前橋を支えてきた歴史を示す文化財の数々を頁をめくってご覧いただきたい。

Ⅰ．天然記念物

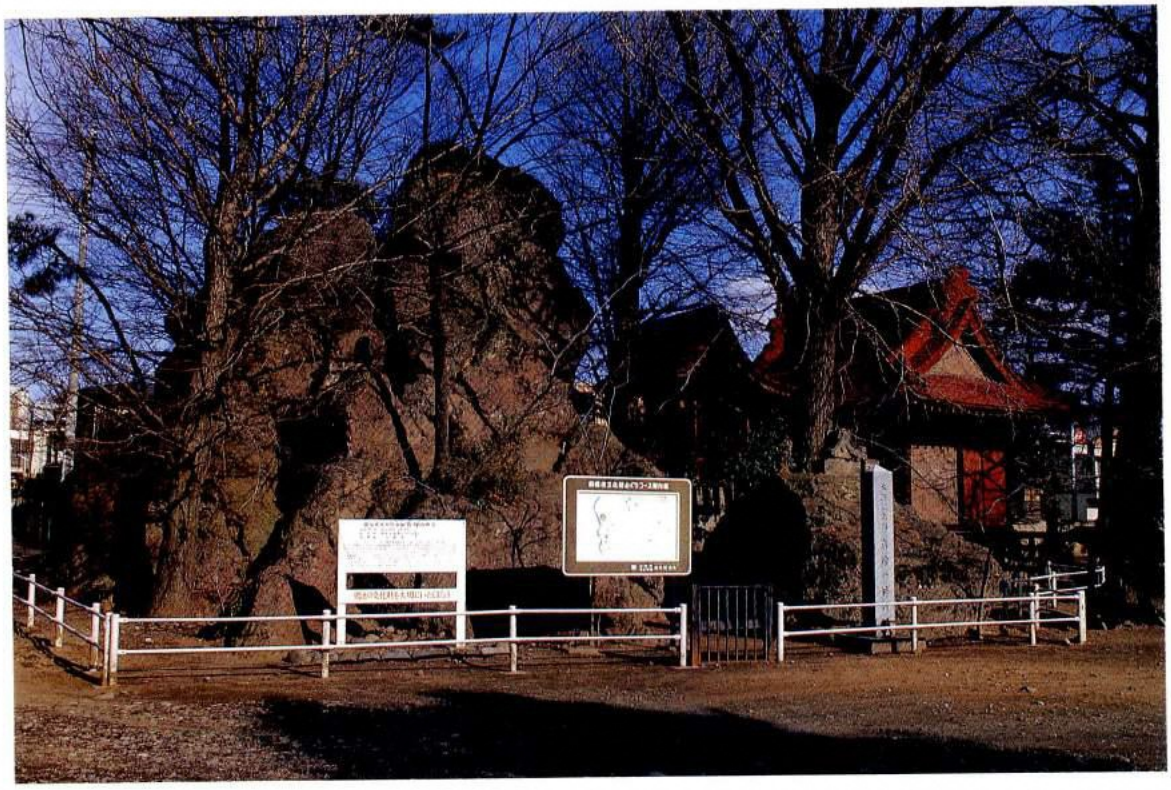


岩神の飛石

わが国及び前橋市にとって自然を記念する動物・植物及び地質鉱物で、価値の高いものを天然記念物として指定しています。自然の力を物語る巨大な岩石である「岩神の飛石」や植物では、珍しい現象がみられる「オハツキイチョウ」などがあります。

1．岩神の飛石

国指定天然記念物　昭.13.12.14
昭和町三丁目29―11　稲荷神社
周囲70m、高さ9.6m



一見いくつかの岩石を寄せ集め積み重ねたように見える巨岩であるが、実は一塊の石で、埋没部分を含めると周囲70m、高さが20mにも達するとみられる。

この巨岩（熔結凝灰岩）は、推定によるとカルデラ形成前の赤城火山の山頂付近にあった岩塊が、大規模な火砕岩類の流れにのって、坂東橋付近に押し出され、いわゆる「流れ山」となっていたが、その後、「前橋泥流」によって押し出され、現在の位置に至ったものと考えられている。これは、前橋の地形形成の歴史に大きくかかわっていることであり、また、巨大な自然の力を物語る神秘の岩である。

2．前橋高等学校のラクウショウ

市指定天然記念物　平５．４．16
下沖町321－１　県立前橋高等学校
樹高20m、目通周3.0m

ラクウショウは、北アメリカ大陸東南部原産のスギ科の落葉針葉樹であり、秋になると枝と葉が鳥の羽のように舞い落ちることから「落羽松（ラクウショウ）」と名づけられた。また、沼地に多く生息するため、沼杉ともいう。

水沼製糸所を創設した星野長太郎（黒保根村出身）が、明治26年(1893)、アメリカ大陸発見400年記念大博覧会に入賞した生糸の受賞式のために渡米した際、持ち帰ったうちの１本といわれる。

県内には３本現存することが確認されており、そのうち前橋高等学校のものは、明治30年頃、紅雲町にあった旧前橋中学校の校庭に植えられ、その後、明治57年４月に現在の下沖町の校庭に移植された。市内の樹木の中でも巨木であり、伝来の由緒を合わせて貴重である。

3．総社神社の社叢けやき

市指定天然記念物　平９．４．21
元総社町2377　総社神社
樹高15～30m、目通り周3.5～6.0m

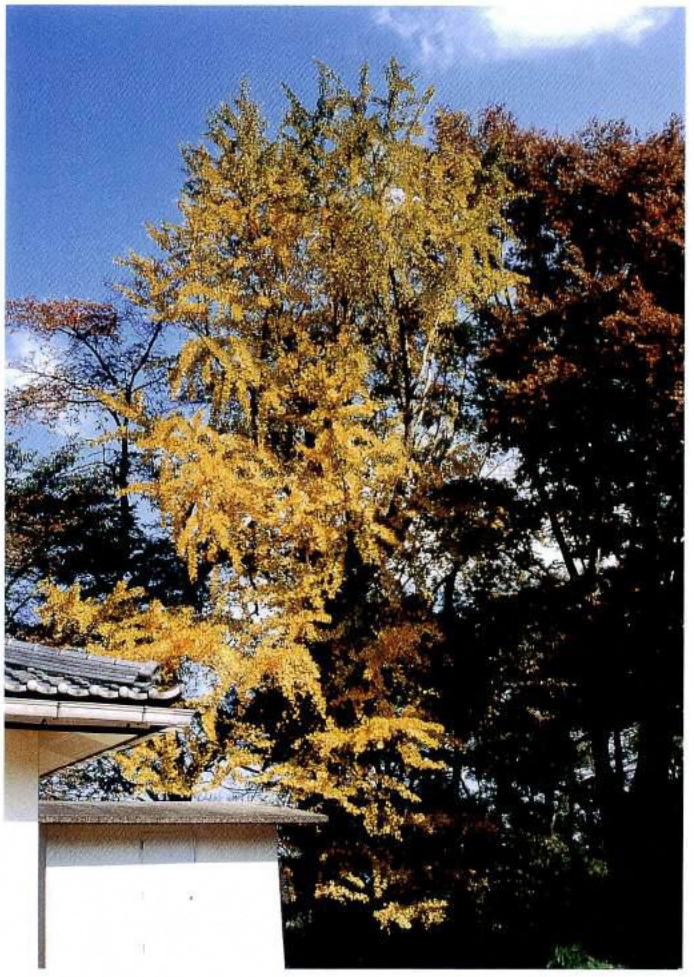
総社神社は、永禄年間（1560年頃）に現在地に遷宮されたとの社伝がある。

境内地には、ケヤキやイチョウをはじめ、100本以上の樹木が茂っており、神社の森が良好に保存されている。樹高も20～30mと高いため、遠くからでも望むことができる。そのうち、特に巨大なケヤキの木の６本が天然記念物として指定されている。これらの６本のうち、境内中央の一番大きいケヤキの木は、目通りの周が６mもあり、神社の御神木となっている。なお、4900m²の境内地が前橋市保存樹木の樹林地第６号としても指定されている。

4．西大室公民館のオハツキイチョウ

にしおおむろこうみんかん

市指定天然記念物　平10．4．10
西大室町1684　西大室公民館
樹高25m　目通り周2.2m



このイチョウは、西大室町公民館に隣接して生育する、樹高25m、幹の周囲2.2mの雌株である。オハツキとは「御葉付」のことで、実（ぎんなん）がイチョウの葉の縁辺につく奇態をしめすものである。これは、現在では一般に見られない本来の形質が、偶然に出現する遺伝子の「先祖帰り」の現象であり、イチョウの花が葉から変形したことを物語っている。この現象は、木全体ではなく、一部の枝に出現しており、またそれが特色となっている。ぎんなんは葉の前縁部につき、双方で栄養分を取り合うため小ぶりである。

本県では、他にこのようなイチョウは発見されておらず、国指定天然記念物の水戸市のイチョウに次いで関東地方で２例目であり、大昔のイチョウの形質を今に残す貴重な植物である。

II. 史　　跡

宝塔山古墳石棺

前橋市は古墳の宝庫です。東日本最古の前方後円墳とされる前橋天神山古墳から古墳時代の終末期を飾る宝塔山・蛇穴山の両古墳にいたるまで、立派な古墳があります。

また、力田遺愛碑、郷蔵、車橋門跡は群馬県並びに前橋市の近世の政治、経済、社会等の歴史の理解に欠かせないばかりでなく、現在に当時の様相の一部をしのばせてくれます。

5．（総社）二子山古墳

国指定史跡　昭.2.4.8
総社町植野二子山368
全長89.9m、前方部　幅61m、高さ8m、後円部　径44m、高さ7m
古墳時代（6世紀末～7世紀初頭）

江戸時代から出土遺物のすばらしさで注目されたこの古墳は、二段に築造された前方後円墳である。墳丘表面には葺石がみられ、また、周堀も周囲の地割りからその痕跡が認められる。

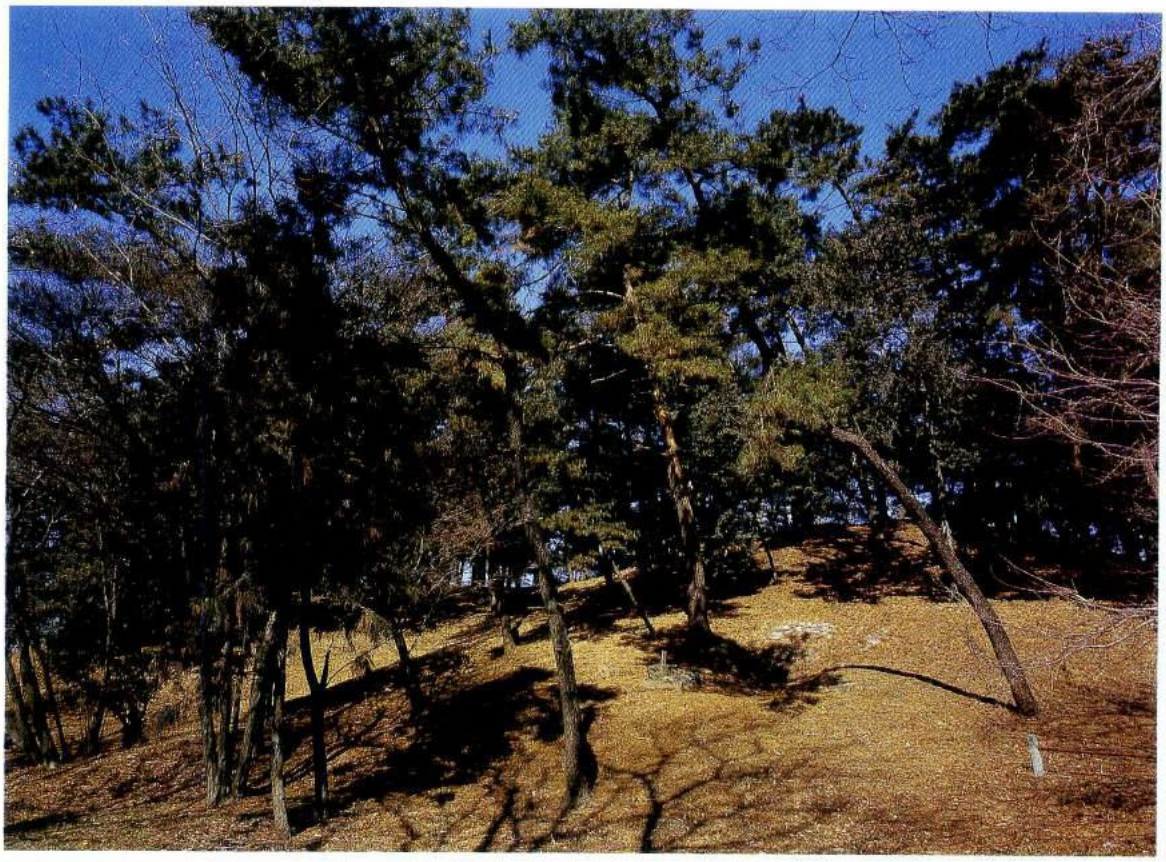
埋葬主体部として、後円部に切石加工した角閃石安山岩をもちいた全長9.4mの横穴式石室（現状は天井石が崩落している）がある。また、前方部にも自然石乱石積みの全長8.76mの横穴式石室をもつ。

この古墳は、総社古墳群中最大の規模であり、墳丘に構造を異にする2つの石室をもつ古墳として注目されている。

※　横穴式石室……石室の横に入口があり、遺体を安置する玄室とそれに通ずる羨道から成る。追葬が行われることも多く、6世紀以後盛んに造られる。

6. 前二子古墳

国指定史跡　昭. 2 . 4 . 8
西大室町二子山2659他
全長93m、前方部　幅62m、高さ12m、後円部径72m、高さ13m
古墳時代（6世紀前半）

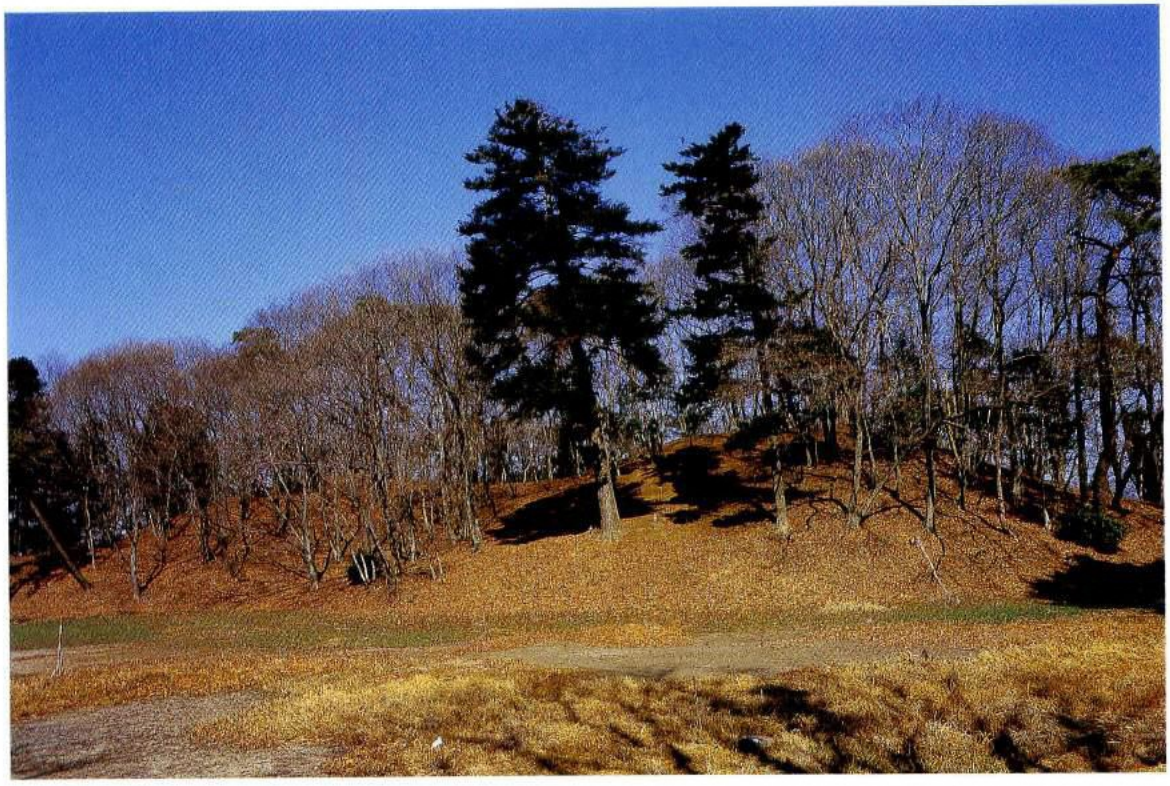


大室古墳群の中核をなす前方後円墳の一つで、周囲に幅約20mの周堀、その外側に幅約2mの周堤が巡り、円筒埴輪が配置されていた。後円部には、自然石積みの細長い横穴式石室があり、玄室と、それに通ずる羨道部とは、楣石及び玄門により区画されている。石室全長は約14mあり、その長さは、本県の横穴式石室中屈指である。また、石室の側壁には赤色塗彩の痕跡がみられる。

明治11年に発掘され、鏡、馬具類、鎗や土器類など豊富な副葬品が発見された。その中の四神付飾土器（国認定重要美術品）をはじめとする須恵器の一群は、関東地方の古墳出土の須恵器としては古式のものとみられている。

7. 中二子古墳（なかふたごこふん）

国指定史跡　昭. 2 . 4 . 8
東大室町五料1501他
全長107.5m、前方部　幅74m、高さ10m、後円部　径65m、高さ10.5m
古墳時代（6世紀中頃）



前二子、後二子古墳の間にはさまれた二段築造の大型前方後円墳で、周囲には二重の堀がめぐらされている。堀は北と東側部分に良く旧状が残る。南側は溜（ため）池に利用され水をたたえている。また、東から北側にかけては、内堀と外堀の間に中堤帯（ちゅうていたい）といわれるものが土手状に見られる。この堀を古墳の規模に入れると全長200m前後の大古墳になる。埋葬主体部は未発掘とされ不明であるが、南北に隣接している前二子、後二子の両古墳同様に横穴式石室であろうと推定されている。埴輪片は墳丘西側の畑地に散布が見られる。

中二子古墳は、前二子・後二子の両古墳とともに上毛野国（かみつけぬのくに）の名族上毛野（かみつけぬ）氏一族の墳墓であろうと推定される。

8. 後二子古墳（うしろふたごこふん）

国指定史跡　昭.2.4.8
西大室町内堀2616－1他
全長76m、前方部　幅55m、高さ9m、後円部径48m、高さ9m
古墳時代（6世紀後半～7世紀初頭）

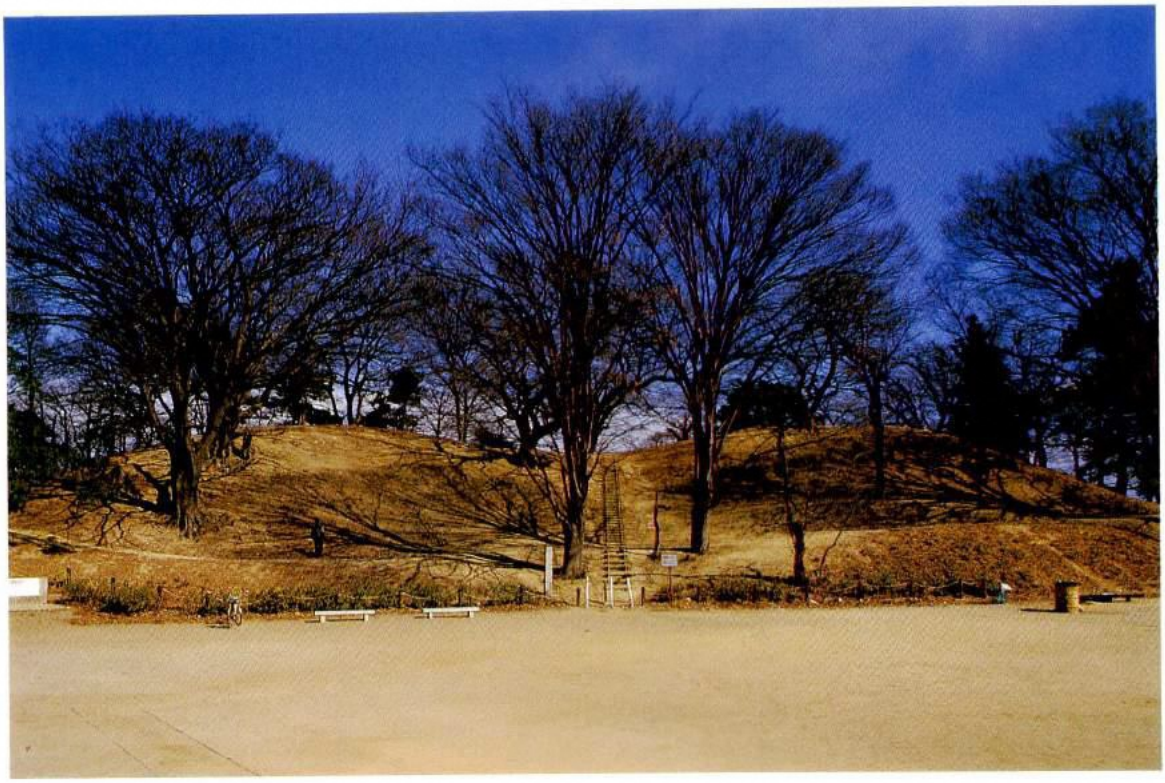
中二子古墳の北側に前方部を西方に向けて位置する前方後円墳である。赤城山南麓一帯に見られる低台地を利用し、墳丘は二段に構築されている。周囲には堀がめぐらされていたが、現在ではほとんど埋まってしまっている。

埋葬主体部は、後円部の南南西方向に開口した横穴式石室で、左右壁石には、安山岩質の自然石を乱石積（らんせきづ）みし、奥壁・天井石には特に巨岩を用いている。石室は全長8.9m、奥壁幅2.6m、玄室長4.8mで、高さは奥壁で約2mである。明治11年の発掘により、武具類、馬具類、須恵器類などが発見されている。

7世紀に入り、次第に巨大化する横穴式石室の傾向を見ることができる。なお、西側にある小古墳も国指定史跡になっている。

9. (天川)二子山古墳

国指定史跡　昭.2.6.14
文京町三丁目26
全長104m、前方部　幅76m、高さ9.5m、後円部　径72m、高さ11m
古墳時代（6世紀後半）



前橋市街地の南東、文京町から朝倉町にかけて、かつて大小の古墳が集中的に存在し「朝倉古墳群」とされていた。この古墳は、その古墳群中の代表的なものである。墳丘は、全長にくらべて、後円部の径や前方部の幅が比較的大きく、くびれの少ないずんぐりとした形である。墳丘の表面には、川原石が多く認められ葺石とみられる。また、周辺には埴輪片の散在もみられ埴輪配列の存在が推定される。更に周堀もその痕跡を残している。

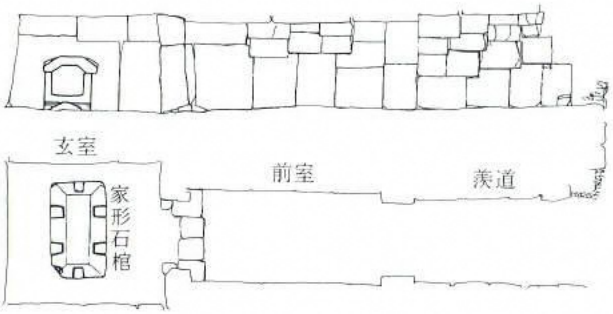
埋葬主体部は、学術的な発掘調査が行われていないため不明であるが、大規模な横穴式石室と推定される。この古墳の地は、上毛野氏の一族とされる朝倉君の本拠地と推定される。

10. 宝塔山古墳

国指定史跡　昭.19.11.13
総社町総社1606
一辺の長さ　54m、高さ11m
古墳時代（7世紀末）

この古墳は総社古墳群中にある大規模な方墳である。墳丘上が総社藩主秋元氏歴代墓地に利用され、その際、多少の改変がなされている。墳丘の南側中復に横穴式石室をもつ。この石室は、羨道、前室、玄室の三部分からなる複室のもので全長12.4mをかぞえる。壁・天井には、安山岩をきれいに面取り加工した切石が使われており、表面に漆喰を塗布した跡が見られる。玄室には長さ2.3m、幅1.3m、高さ1.33mの家形石棺がある。

石棺の蓋石の側面には、方形の縄掛突起を造り出し、身部には、仏教文化の影響とみられる格狭間の手法がみられる。



宝塔山古墳の石室

11. 八幡山古墳（はちまんやまこふん）

国指定史跡　昭.24.7.13
朝倉町四丁目9－3他
全長130m、前方部　幅59m、高さ8m、後方部　幅72m、高さ12m
古墳時代（4世紀後半）

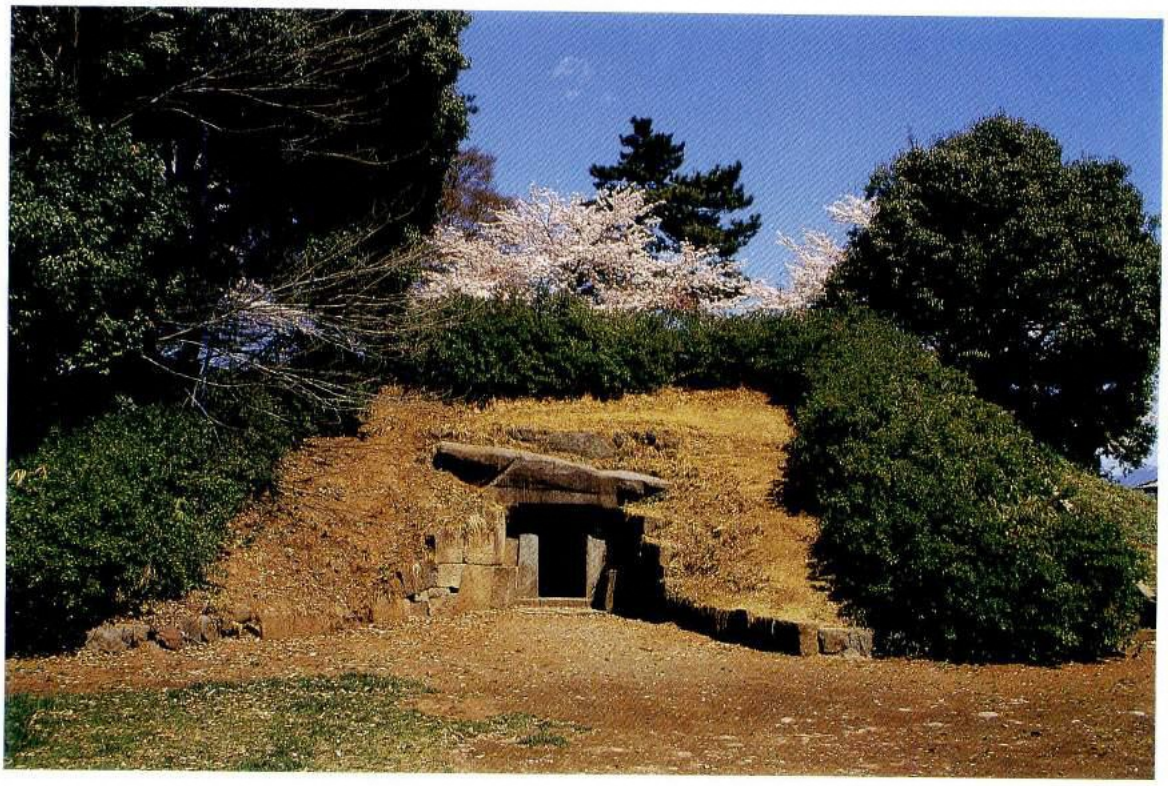
この古墳は高い山と低い山が二つ連なった形をしているが、墳丘（ふんきゅう）の平面形は、四角形に台形の上底を接合したような形の前方後方墳である。周堀は、深さ50cm前後の浅いもので後円部の周囲で幅30m前後に認められた。この周堀を含めると、古墳の大きさは実に南北180m、東西125mにもなる。

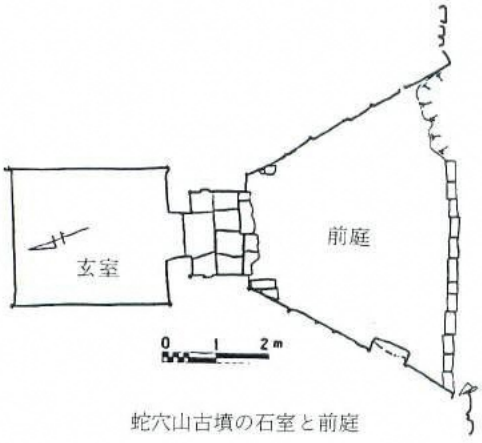
埋葬主体部は未調査であるが、後方部の墳頂部近くに玉石敷きがあり、一部に粘土の詰めてある部分も認められたという。おそらく礫槨（れきかく）等の竪穴系の埋葬施設が設けられていたものであろう。

東国、最大の前方後方墳として注目されている。

12. 蛇穴山古墳（じゃけつざんこふん）

国指定史跡　昭.49.12.23
総社町総社1587－2
一辺の長さ39m、高さ5m
古墳時代（8世紀初頭）





蛇穴山古墳の石室と前庭

この古墳は、総社小学校校庭の南東に接して所在する。以前は、円墳とされていたが、昭和50年の発掘調査により、一辺39m前後の方墳と判明した。高さは、現状で5m、墳丘の周囲には幅12m前後とされる周堀がめぐらされていた。

埋葬主体部は羨道部のない横穴式石室で、天井・奥壁・左右壁ともきれいに面取り加工された一石の輝石安山岩で組み立てられており、しかも壁面には、漆喰（しっくい）塗布の痕跡をとどめている。玄門は、奥幅90cm、前幅80cmである。

八世紀初頭に構築されたと推定されるこの古墳は、石材加工技術のすばらしさの中に仏教文化の影響が強く感じられる。

13. 前橋天神山古墳

県指定史跡　昭.45.12.22
広瀬町一丁目27－7
全長129m、前方部　幅68m、高さ7m、後円部　径75m、高さ9m
古墳時代（4世紀後半）

粘土槨

広瀬団地内に後円部の中心部分のみを残す前橋天神山古墳は、もとは大前方後円墳であった。墳丘の規模は全長129mにも達し、後円部の表面は三段に構築され、頂上部は石敷となっており底部穿孔の壺形土器等が配列されていた。東日本最古の前方後円墳とされるこの古墳には周堀や葺石の跡も確認された。

主体となる埋葬施設は、後円部石敷面下の墓壙の底部をさらに掘り込んで造られた粘土槨で、長さ7.8m、幅1.2m前後の巨大な割竹形木棺を被覆したものと判明した。その槨内より、銅鏡5面、銅鏃30本、鉄剣などの武具、斧、ヤリガンナなどの生産用具、石製の紡錘車、顔料の入った土師器坩など百数十点にのぼる遺物が発見された。なお、これらの遺物は現在文化庁の所有となり重要文化財に指定されている。

三角縁神獣鏡

14. 荒砥富士山古墳

県指定史跡　平. 9 . 3 .28
西大室町813―2、885―3、4
墳丘径36m　高さ3m
古墳時代（7世紀末）

この古墳は、周囲に幅約2mの堀をめぐらした円墳で、墳丘は4段に構築され斜面には河原石を用いた葺石が認められる。

埋葬施設は、南南東に開口する全長6mほどの両袖型横穴式石室で、羨道、玄室ともに天井石が残存し、保存状況は極めて良好である。石室の前庭は、その平面形が台形状に広がり、正面及び両側面は扁平な河原石を積み上げ精巧な構造となっている。

石室の玄門部と羨道部には扉石が確認され、石室開閉の構造を示す具体的事例として注目される。赤城山南麓の終末期を代表する古墳の一つとして貴重である。

15. 新田塚古墳

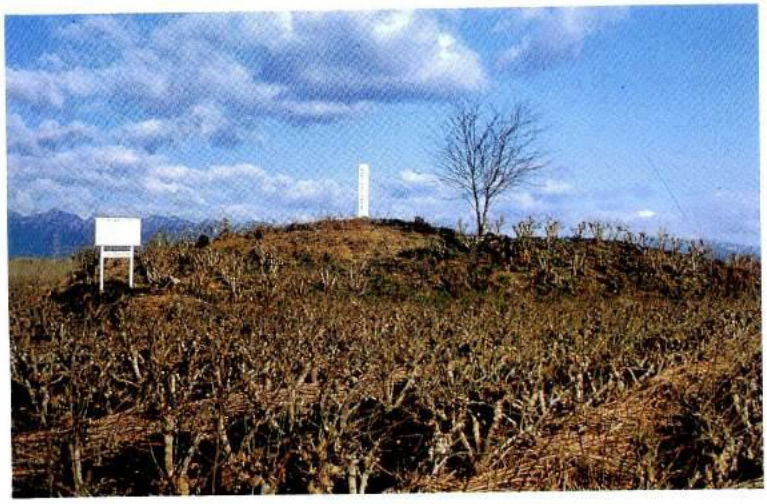
市指定史跡　昭.45.2.10
上泉町新田塚2694―2
直径30m、高さ4.5m
古墳時代（7世紀）

赤城山南麓の標高140mのところに所在する新田塚古墳は、直径約30m、高さが4.5mあり、桂萱・芳賀地区で最大級の円墳の一つである。墳丘は、比較的原形を良くとどめており、北東部には周堀の跡が明確にみられる。古墳周辺に埴輪の破片等は見られず、埴輪の配列はなかったものと推定されている。

埋葬主体部は未発掘とされているが、横穴式石室の存在が推定されており、七世紀代の構築であろうと考えられている。

16. 経塚古墳

市指定史跡　昭.48.9.24
東善町経塚乙737
直径30m、高さ3.2m
古墳時代（7世紀）

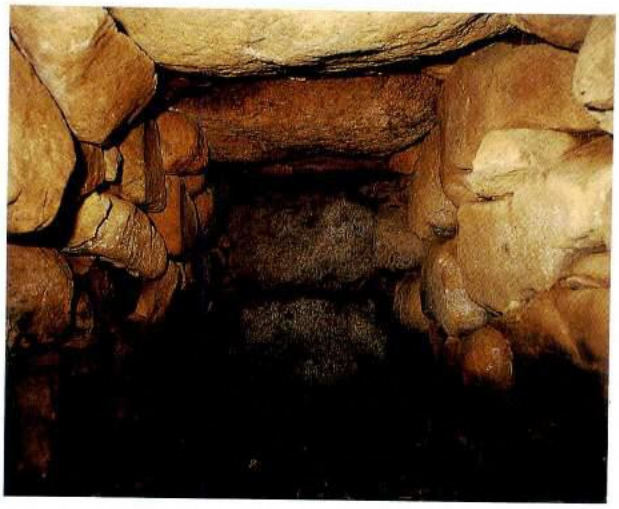


この古墳は、広瀬川右岸、前橋市の東南端に位置し、墳丘は円形を呈しており、現状で、径約30m、高さ3.2mの小円墳である。墳丘上には、川原石が多数認められ、葺石で墳丘上が覆われていたことがわかる。墳丘の北側は、比較的良く原形を保ちその平面形は、きれいな円を描いている。

『上毛古墳綜覧』には、周堀があったと記されているが、調査がなされていないため、その形状・規模は不明である。また、埴輪の有無・横穴式石室と思われる主体部の様子等は明らかでない。

17. オブ塚古墳

市指定史跡　昭.48.9.24
勝沢町420
全長35m、前方部　幅13m、高さ2.5m、後円部　径18m、高さ3.5m
古墳時代（6世紀後半）



この古墳は、赤城山南麓の緩やかな傾斜地に位置する前方後円墳である。前方後円墳としては小規模であるが、後円部に比較して前方部が低く、古い形をとどめている。周堀の規模・形状は明瞭でない。

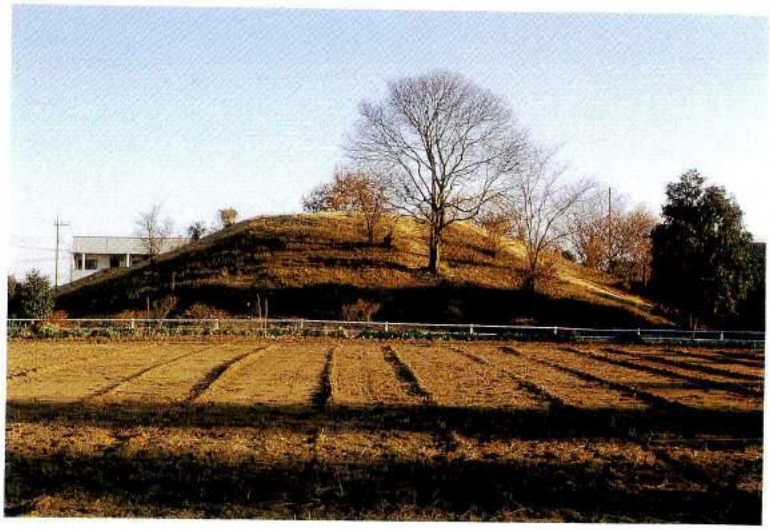
埋葬主体部は、後円部に南南西に開口した自然石積の横穴式石室がある。石室は、長さ5m、幅1.5mで、幅に対する長さの比が3.3で、横穴式石室としては古いものと考えられている。発掘調査の際、石室からは副葬品の一部が、また墳丘からは円筒埴輪列、形象埴輪列などが発見されている。

18. 亀塚山古墳

市指定史跡　昭.54.3.26
山王町一丁目28－3
復元長約60m、後円部径約40m、高さ6.5m
古墳時代（6世紀前半）

この古墳の墳形は、円墳状の主部に低く細長い方形の壇状部を取り付けたもので、その形が帆立貝に似ていることから、帆立貝式古墳と言われている。しかし、「亀」の形を思わせるものがあるので、この地では古くからこの古墳を亀塚と呼んできた。

『上毛古墳綜覧』によれば、周堀と葺石が確認され、すでに発掘されたとされている。



19. 今井神社古墳

市指定史跡　昭.56. 4 .27
今井町818　今井神社
全長71m、前方部　幅50m、高さ 7 m、後円部径44m、高さ 7 m
古墳時代（5 世紀後半）

今井神社古墳は、荒砥川の東岸の河崖上縁にある前方後円墳である。周辺は昭和10年の調査では本墳を中心として、15基の古墳群が形成されていたが、現在はその殆どが、削平されている。墳丘上に神社社殿が築かれているためやや変形されているものの、ほぼ原形を保っている。昭和55年に発掘調査され、前方部前幅は、後円部径よりも大きいことが明らかとなった。また、周囲には周堀も確認された。

埋葬主体部は、竪穴式石室で、現在墳頂部には縄掛突起を持った石棺の蓋石が、現存している。墳丘上には埴輪の配列が確認されており、5 世紀後半の築造と考えられる。

20. 塩原塚古墳

市指定史跡　昭.58. 4 .25
田口町字千手堂582—8・10
直径14m、高さ 3 m（北側2.6m）、石室長5.9 m
古墳時代（7世紀初頭）

この古墳は、昭和10年古墳の県下一斉調査にもれた名称もない一小円墳であった。しかし、昭和29年の発掘調査によって角閃石安山岩削石積みの横穴式石室が確認され、副葬品も数多く発見されたので、土地所有者の名をとって塩原塚古墳と名付けられた。

葺石は、傾斜面のみに認められる。墳丘の頂上部にはなく、平坦化されている。埴輪は見あたらない。

石室は横穴式で、羨道と玄室で構成され、玄門は認められない。石室の壁石は、榛名山二ツ岳形成時噴出の角閃石安山岩の削石及び截石で積まれており現在、利根川流域で発見されている角閃石安山岩使用古墳のうち最上流に位置する。

21. 王山古墳

市指定史跡　昭.59.3.12
大渡町一丁目6－1
全長75.6m、前方部　幅63.1m、高さ3.9m、
後円部　径50m、高さ4.5m
古墳時代（6世紀中頃）

王山古墳は、中央大橋西側の利根川右岸に位置し、古い様相の横穴式石室を埋葬主体部とする前方後円墳である。石室は、後円部にあり、全長16.37m、玄室奥幅1.6mで、奥に長く幅のせまいものである。

この古墳は六世紀中頃の築造で、当初は円墳としてつくられ、後に前方部が付設されて前方後円墳になったものである。なお、後円部は石だけでつくられた「積石塚」といわれるもので、朝鮮半島の古墳文化の影響を受けていると考えられる。

昭和47・49年度に発掘調査がなされたが、その後、墳丘に約1mの盛土をし、公園として保存整備されている。

22. 金冠塚古墳

市指定史跡　昭.61.6.6
山王町一丁目13－3
全長52.25m、前方部　幅42m、高さ3m、後円部　径32.3m、高さ4m
古墳時代（6世紀後半）

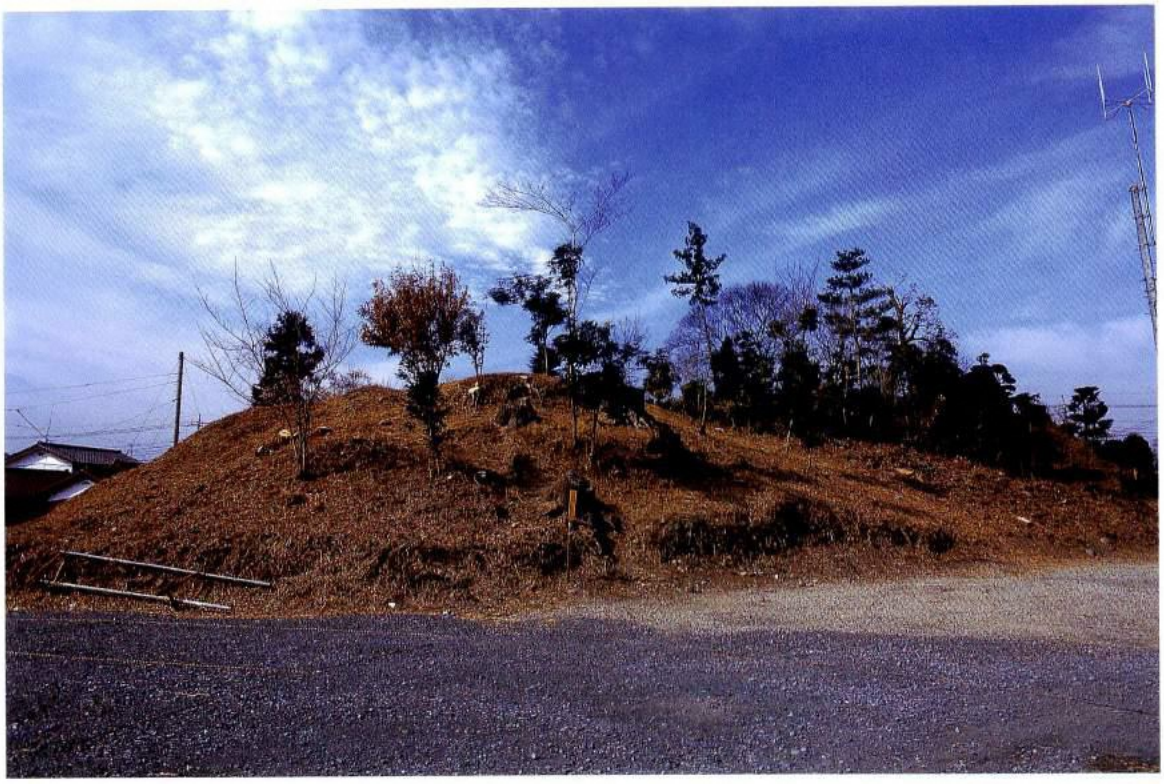
広瀬川右岸、山王町に位置する前方後円墳で、周りには堀跡も認められた。石室は、横穴式石室で、後円部の南西方向に開口し、角閃石安山岩を五面に削った石を用いている。玄室は、長さ3.64m、幅2.64mで、河原石を使った馬蹄形の裏込めにより包み込まれている。

出土遺物は、新羅の古墳出土の金冠に類似した立花形の金銅製冠（天冠）をはじめ、大帯、甲、刀、槍、土師器、須恵器などがあり、新羅文化の影響を物語っている。その他、形象埴輪・円筒埴輪なども多数発見されている。昭和56年に発掘調査を、57年に盛土復元をし、全面に芝を植える保存整備が実施された。

金銅製冠

23. 不二山古墳

市指定史跡　平.9.4.21
文京町三丁目151―6
全長54.5m、前方部幅35m、高さ6m
後円部　径31.5m、高さ7m
古墳時代（6世紀末）



いわゆる朝倉古墳群の北端に位置する前方後円墳で、墳丘の北及び西側の一部は削られているが辛うじて原形を保っている。後円部南側には、かつて横穴式石室が開口していたが、現在は閉じられている。

石室は両袖型で、五面削りの角閃石安山岩を用いて互目積みに構築されている。副装品は既に盗掘されていたためその全貌は明らかでないが、冠をはじめ直刀、槍、鉄鏃、耳環、玉などがあり、その優秀さが注目される。

史跡天川二子山古墳と共に朝倉古墳群を代表する古墳の一つとして重要である。

24. 上野国分寺跡（こうずけこくぶんじあと）

国指定史跡　大.15.10.20
元総社町小見1650他、群馬郡群馬町東国分
寺域約二町（約216m）四方
奈良時代

聖武天皇は、天平13年（741）に各国に鎮護国家の為に国分寺を造らせた。上野国分寺も、その詔（みことのり）により上野国の中心、国府の近くのまほろばの地に建立された。その後律令政治の衰退と共に寺の維持管理が困難となり、寺は荒廃を始めた。現在は塔跡、金堂跡に礎石が残り、布目瓦の散布が認められるだけとなった。

この寺は、寺域が約方二町であると言われていたが、昭和44・45年と55年からの発掘調査により伽藍（がらん）としての金堂、塔、南大門などの位置・形状が明らかになった。また、文字の記された瓦も多数出土したことにより、この寺が上野国内各地の豪族の協力により建立されたことも判明した。

25. 山王塔跡

国指定史跡　昭.3.2.7
総社町総社2408　日枝神社
塔基壇　方17m、塔中心礎石　東西3m、南北2.5m、厚さ1.5m
古墳時代（白鳳時代）

大正10年、総社町山王の日枝神社境内の松の根かたで、偶然大きな礎石が発見された。石の表面に、径65cmの柱受けの孔をもち、その内部に、径27cm、深さ30cmの舎利孔をもつみごとな「塔中心礎石」である。また、昭和54年の発掘調査により、塔の基壇の一辺の長さが17mと推定された。その際屋根からずり落ちたとみられる状態で多数の瓦も出土した。

山王塔跡近くからは、根巻石や石製鴟尾が発見されており、全国的にも稀にみる豪壮、華麗な古代寺院があったことが立証されている。その名は、地名にちなんで「山王廃寺」と言われてきたが、現在では、「放光寺」とヘラ描きされた文字瓦が出土したことにより、高崎市の山上碑にある「放光寺」という寺名の寺であったとも考えられている。

26. 女（おんな）　堀（ほり）

国指定史跡　昭.58.10.27
富田町、荒子町、二之宮町、東大室町、西大室町、飯土井町、佐波郡赤堀町
長さ12km、底幅約12～20m、深さ３～５m
平安時代末期

女堀は、赤城山南麓に前橋から佐波郡東村西国定まで、堀と堤を連続的に残している長大な農業用水路とみられる遺構である。

この女堀については、諸説があるが、位置及び文献研究から平安時代末期に、平将門の乱を平定した藤原秀郷を祖とする淵名（ふちな）氏が淵名荘（旧佐位郡全域）の開発を目的として掘削したという説が有力である。工法的には、上・中・下三段の掘削方法がとられ、「小間割（こまわり）」と呼ばれる土工単位が使われた。両側の堤は堀の中より排土した土である。第二次大戦中に完成した大正用水も同じ方法で掘られ、当時の土木技術水準の高さがうかがわれる。女堀は、莫大な労働力が投入され掘削されたが、未完成に終った。

27. 力田遺愛碑

県指定史跡　昭.25.6.16
総社町総社1607　光巌寺
高さ1m68cm
江戸時代

慶長6年(1601)総社藩主となった秋元長朝は、農業を盛んにしようとした。しかし、領内は水利が悪く、荒地が多かった。そこで、領主・領民一体となって、利根川から水を引くことにした。慶長9年(1604)用水の開削は成功し、農民は、経済的に恵まれるようになった。その後、秋元氏は、総社の地を離れ、甲斐国谷村(現山梨県)へ移った。しかし、その恩恵を受けた百姓等は、長朝の事績を永久に記念するために安永5年(1776)力田遺愛碑(田に力めて愛を遺せし碑)を建てたのである。江戸の著名な書家沢田東江による碑文の最後に、ひかえめに書かれた「百姓等建」の4文字には、年代を超えた領主と領民の温かい人間関係がにじみ出ている。

28. 石田玄圭の墓

県指定史跡　昭.26.4.24
高井町一丁目34—12
高さ 1 m80cm
江戸時代

石田玄圭は、医者として多くの人々に尽くしたばかりでなく、天文・暦学・数学者として弟子の養成につとめ、江戸文化爛熟期の華を群馬の地に咲かせた人である。玄圭は、佐位郡（現佐波郡の東部）に生まれ、群馬郡高井村（現高井町）に移り、文化14年（1817）没した。青年時代、江戸の医者三浦青溪に入門し、また数学は、江戸の藤田貞資に教授を受け、関流五伝の免許を伝授され、さらに、「暦学小成」等を著している。

総社町から榛東村へ向かう県道新井前橋線の南に、立ち並ぶ工場群から離れて、静寂な墓地が画されている。その墓地の西端に「琑亭一惠居士」と刻された墓石がある。これが石田玄圭（初代）の墓である。

29. 上泉郷蔵附上泉古文書

県指定史跡　昭.26.6.19
上泉町宿1168－1
間口14.4m（8間）、奥行5.4m（3間）
江戸時代

この郷蔵は、瓦葺荒壁塗りの土蔵で、寛政8年（1796）の創建である。江戸時代、郷蔵は、年貢米徴収及び一時的保管のために建てられたが、天明の大飢饉以後備荒貯穀のための倉庫的な性格が強くなった。明治以降は、他に利用され、本来の姿を失うものが多かったが、上泉郷蔵は、本来の目的を貫き、明治42年（1909）まで存続した。このため、関係古文書も豊富に残され、現在、その古文書は、新築された収蔵庫に保存されている。この郷蔵の厚い荒々しい土壁には、当時の農民たちの尊い汗がぬり込められている。

なお、県内に現存する郷蔵は、この他に山田郡大間々町桐原、利根郡片品村花咲などのものがある。

30. 前橋藩主酒井氏歴代墓地

市指定史跡　昭.39.12.22
紅雲町二丁目8－15　龍海院
墓石18基（内2基は伊勢崎藩主の墓）
江戸時代

龍海院境内の南西隅に酒井氏歴代墓地がある。この墓地には、南北方向に大きな墓石が2列に並んでいる。西側に初代重忠夫妻の墓をはじめ9基、東側に7基、他に2基ある。4代忠清から15代忠顕までの墓石は同形同寸で広さ約40m²、高さ80cmほどの石造壇の上に建てられている。周囲には、石柵、石扉がめぐらされ、手前には、燈籠と手洗い盤が置かれている。2代忠世、3代忠行の墓地も同規模で三河様式の墓石をもちい、酒井氏の権勢がしのばれる立派なものである。江戸時代の前橋藩主は、酒井、松平の2氏であるが、歴代墓地が前橋に残っているのは、酒井氏だけである。酒井氏は、初代重忠から9代忠恭に至る約150年間藩主を歴任し、前橋と深く結びついていたのである。

31. 前橋城車橋門跡

市指定史跡　昭.39.12.22
大手町二丁目５－３
基台　前幅4.25m、奥行7.7m、高さ1.4m、基台の間隔約10.9m
江戸時代

車橋門前の堀の石垣

酒井重忠が前橋藩主になった時、家康は「汝に関東の華をとらす」といったという厩橋（前橋）城は、宇都宮・川越・忍（行田）の城と並んで関東の４平城の一つとされ、特に、幕府にとっては北関東のおさえの城として重要であった。

車橋門は、前橋城の外曲輪（土居曲輪）と加内（金井）曲輪を結ぶ大手筋にあって、数ある城門の中で、特に、重要な門の一つであった。「直泰夜話」によると、初めは、２本の柱の上に１本の横木をのせた冠木門であったが、忠清（４代）の時、通路をはさんだ２つの石積み基台の上に渡櫓をのせた渡櫓門に改められた。今に残る絵図に、その威容がしのばれる。前橋城は現在、県庁北側の土塁、児童遊園地の空堀とこの車橋門跡だけが、当時の面影を伝えている。

なお、昭和63年には建築工事に際し、車橋門前の堀の石垣が発見された。

32. 下村善太郎の墓

市指定史跡　昭.49.8.26
紅雲町二丁目8－15　龍海院
高さ1m85cm
明治時代

市内紅雲町、曹洞宗の名刹龍海院に初代前橋市長下村善太郎の墓がある。

下村善太郎は、明治の初め前橋市の発展の基礎を築いた生糸商人である。善太郎は、文政10年（1827）本町の小間物商の家に生まれ、17歳で結婚したが、事業に失敗し、24歳で八王子へ移った。安政6年（1859）横浜開港を機に商才を発揮し、生糸輸出で大成功をおさめた。文久3年（1863）帰郷し、生糸商「三好善」を開く。その後は、桃井小学校、師範学校設立、利根橋架橋、臨江閣建設等々前橋の発展に私財を投入した。中でも明治9年（1876）の県庁誘致の業績は、特筆されるものである。明治25年（1892）市制施行の際、初代市長に推されたが、翌年任期半ばにして不帰の人となった。享年67歳。前橋市名誉市民第一号。

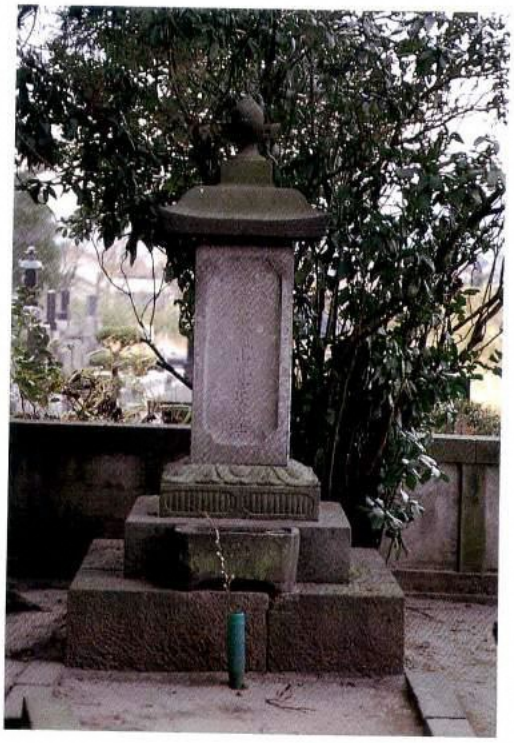
33. 本城氏の墓

市指定史跡　昭.54.3.26
紅雲町一丁目9－14　長昌寺
五輪塔三基　高さ左から2m、2m45cm、2m30cm
江戸時代

本城氏の墓は、長昌寺の境内にある。本城豊前守満茂は、出羽国(現山形・秋田県)57万石の藩主最上氏の最高家臣で城持ちであった。元和8年(1622)最上氏は、家臣団の内紛により所領を没収された。この時、満茂は、前橋藩主酒井忠世に抱えられ、三千石を与えられた。「直泰夜話」によれば、酒井家家臣は、彼らを「最上衆」と呼んでいた。現存する墓三基は、高さ2m以上の五輪塔で、最下部の地輪部にある銘文によると、本城豊前守満茂の夫人、満茂の次女、満茂の養子（親茂）の墓とわかり、寛永年間（1630年前後）に造られたことが知れる。文化8年（1811)、満茂の後裔満主が作らせた絵図面によれば、満茂をはじめ19の墓石と2体の石仏が画れているが、その後、火災・災害等により三基のみ残ったと思われる。

34. 秋元氏墓地

市指定史跡　昭.56.4.27
総社町植野150　元景寺
墓石3基
江戸時代



秋元氏は、上総国秋元之荘に居住したことから秋元氏を名乗り、初め上杉氏(憲政)、次に北条氏、さらに徳川氏に仕えた。秋元景朝は、総社に所領をもち、武蔵国深谷で没したが、上野国勝山（総社町植野）に埋葬された。後に、この地に子息秋元長朝により一寺が建立された。これが、現在の元景寺である。墓地南入口より、真正面に秋元景朝及びその室人春、長朝側室戌の墓がある。景朝の墓は、向かって左側で最も高所、東西4.65m、南北4.5mの墓域内に正面を東に向けてある。室人春の墓は、三つの墓域の中央にあり、景朝の墓より一段低い。また、長朝側室戌の墓は向かって右側、景朝室人春の墓域よりさらに低い位置にある。

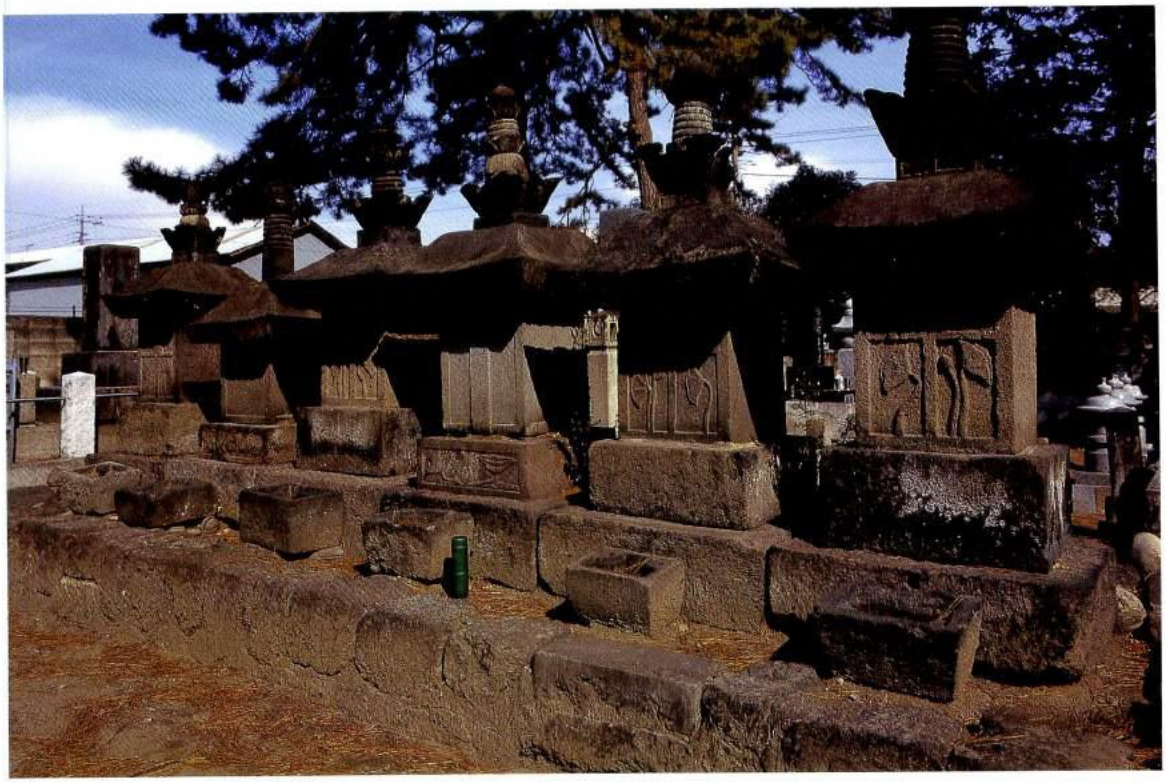
35. 秋元氏歴代墓地

市指定史跡　昭.56.4.27
総社町総社1606
墓石　12基
江戸時代

秋元氏歴代墓地は、光巌寺東方の宝塔山古墳の頂上にあって、南北11.4m、東西10.8mの方形の墓域が形成されている。入口付近には、石製水盤が左右に各1基あり、墓域内には、入口より正面にほぼ同形の墓4基、その左右に各2基、4基の後ろにほぼ同形の墓1基とやや小型の墓3基が並んでいる。各墓石正面（東面）には戒名が、裏面（西面）には没年月日が刻まれており、これを秋元氏系図に合わせて見ると、総社城の築城を行った長朝から明治16年に没した礼朝までとすることができる。

36. 高須家墓地

市指定史跡　平.8.4.5
三河町一丁目19―37　正幸寺
墓石37基
江戸時代



高須家は三河出身の武士であり、前橋藩主酒井氏の家老の家柄で三千石の石高であった。高須家は酒井氏が江戸にいることが多かったため、藩政を取り仕切っていた。貞享元年(1684)に沼田領内の再検地を総奉行として行い、税を軽減することになったため、「お助け縄」と呼ばれ感謝された。また、元禄2年（1689）に前橋藩でも総検地を行い、藩の財政立て直しに大きな功績があった。前橋の藩政史上、欠くことのできない家老であった。

正幸寺本堂脇の墓地には、37基の石殿型の石塔が系統的に保存されており、高須家の家柄を表すのにふさわしいものがある。

37. 二宮赤城神社社地

市指定史跡　昭.59.3.12
二之宮町886　二宮赤城神社
南北約200m、東西約160m
鎌倉～室町時代

二宮赤城神社の社地は、昭和58年6月に社地全域の現況測量が行われ、周囲をめぐる濠や土塁などの図化がなされた。これによると、中世における社地の形態を比較的よく今日に伝えている環濠遺構で、当時の神社形態を知るうえで貴重なものであることが判明した。二宮赤城神社は、納曽利面1面（県）、梵鐘、絵馬4面、宝塔（赤城塔）、式三番叟付伝授書（以上市）等の県・市指定文化財を有し、さらに、社地内には、塔心礎、本殿、神楽殿等があり、神仏混合の一形態をみることができる。昭和59年に、社地全域が史跡に指定されたことにより、二宮赤城神社の歴史的環境が、全体として保存されることになった。

III. 考古資料

山王廃寺跡出土緑釉水注、埦、皿

古墳並びに寺院跡の出土品に優れたものがあります。特に、四神付飾土器・山王廃寺跡出土の根巻石・石製鴟尾は他に類例も少なく、日本歴史上に大きな価値をもっています。土偶も日本を代表するものの一つです。

38. 上野国山王廃寺塔心柱根巻石

国指定重要文化財　昭.28.11.24
総社町総社2408　日枝神社
蓮弁形７個、内径98cm
古墳時代（白鳳時代）

塔の心柱を飾る根巻石と
心礎の上にのせる心柱の様子
（総社資料館展示）

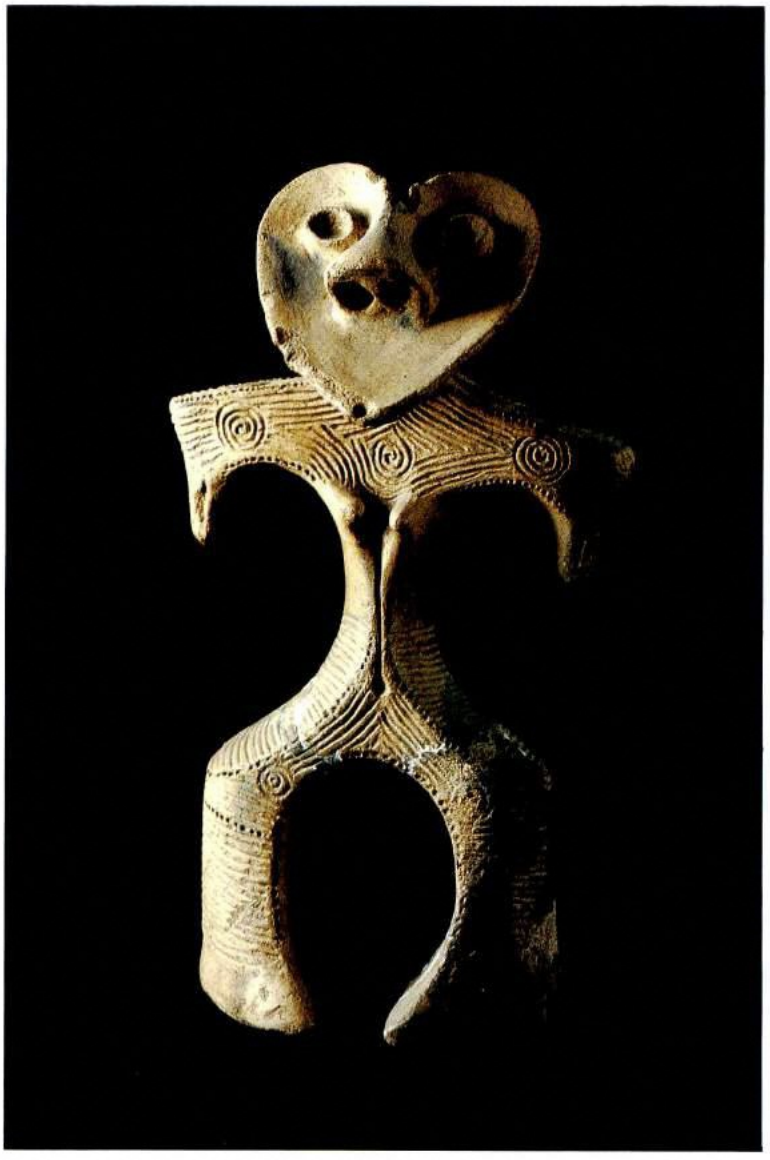
根巻石とは文字どおり、柱の根元に巻かれた石製の装飾品ということから名付けられたらしい。本品は、出土地、出土状態等は不明であるが、輝石安山岩製で７個からなり、蓮弁を形どっている。

完全なもので本品に類似するものに、奈良の興福寺境内のものがある。山王廃寺跡のものは、図のように、半地下式の塔心礎の上に立てられた心柱の基壇面に接する部分を装飾したと推定されている。内径98cm、縁の幅3.5cmを測り、製作にあたっては、高麗尺（１尺＝35cm）が使用されており、塔心礎と大きさも符合する。

39. 土偶（どぐう）

国指定重要文化財　昭.40.5.29
東京都台東区上野公園　東京国立博物館
（山崎郁男）

高さ30.5cm
縄文時代



土偶とは、縄文時代に造られた土製の人形（ひとがた）である。土偶は、完全な形で出土する例はほとんどなく、破損したものが多い。故意に、頭部や手足を欠いたと思われるものが多いことから、これらは、疾病や災害の身代わりに破壊したという説もある。しかし、本品は、発見時は破損していたもののほぼ完存しており、高さ30.5cmを測る。通称ハート形土偶と言われるように、顔の輪郭が、ハート形をなし、両手、両足を大きく開いている。胸に乳頭の表現があることから女性像と推定され、首から下は腹部を除いて、平行沈線文と渦巻文によって装飾されている。文様等の特徴から、縄文時代後期のものも思われる。

本品は、昭和16年吾妻郡吾妻町郷原の国道工事の際に発見されたものである。

40. 四神付飾土器

国認定重要美術品　昭.10.12.18
大手町二丁目３－６　前橋市中央公民館
西大室町自治会より寄託
高さ約58cm、口径19.2cm、底部径27cm
古墳時代

西大室町にある前二子古墳の石室より明治11年に発掘された副葬品の一つである。この土器は、須恵器とよばれる灰色硬質の土器で、高さ約58cmの筒形器台である。その円錐台形に開いた脚台の上縁に、粘土を手びねて形づくった蛇、鳥、亀とみられる稚拙な細工物が配してある。虎は欠落しているが、いわゆる四神を表現していることは明らかである。

このことは、６世紀の初めにすでにこの地に四神思想（古代中国の宇宙観）が伝わっていたことを示すものであり、この古墳を構築したとみられる上毛野氏が、東国の名族という単なる権力者ではなく、何らかの形で朝鮮半島ともかかわりをもつ、進歩的性格の豪族であったことを雄弁に物語っている。

41. 42. 石製鴟尾（せきせいしび）

国認定重要美術品　昭.11.11.28
総社町総社2398　都丸民司氏宅
〃　〃2408　日枝神社
高さ１m余、重さ約１ｔ
古墳時代（白鳳時代）

都丸民司氏宅

日枝神社

鴟尾とは中国の架空の動物で、火災のときに、水を吹き雨を降らせる魔力を持つと言われることから、防火上の呪（まじな）いとして、寺院等の屋根の大棟にのせられるようになった。石製のものは少なく、現存する完全な類品は鳥取県大寺廃寺と山王廃寺出土品の３点のみである。これらは雌雄一対であると言われているが、日枝神社のものは角閃石安山岩であるのに対して、都丸氏宅のものは輝石安山岩であり、石材が違う等の問題点もある。

いずれも胴部等に瓦（かわら）を差し込む孤状（こじょう）の刻みを入れており、金堂（こんどう）等の主要伽藍（がらん）に使用されていたことをうかがわせる。

43. カロウト山古墳石棺

やまこふんせっかん

市指定重要文化財　昭.39.12.22
三河町二丁目１－３　前橋市立中川小学校
長さ２ｍ６㎝、幅１ｍ10㎝、高さ73㎝
古墳時代

文京町二丁目14番地内にあったカロウト山古墳から出土したものである。石材はもろい凝灰岩製で風化してかなり痛みが激しい。規模は、高さ２ｍ６㎝、幅１ｍ10㎝の長方形で、厚さは、16.8～20.5㎝、高さ73㎝を測る。内面はきれいにくり抜かれており、内法は、長さ１ｍ62.4㎝、幅40㎝である。長側面にそれぞれ二つの縄掛突起がある。平面箱形を呈し、側面が直立することから家形石棺の一種とみられる。

石棺の傍らにおかれている石材は玄室の石材とみられる。明治16年に書かれた、『天川村沿革考』等の記述から、石室は切石で墳形も円墳もしくは方墳であったと推定される。横穴式石室内に家形石棺を安置するのは総社町の宝塔山古墳・愛宕山古墳の例がよく知られており、７世紀後半代の築造と考えられる。

44. 埴輪・踊る男子像

市指定重要文化財　昭.58.4.25
勝沢町719　前橋市立芳賀小学校
高さ63cm
古墳時代

小さな帽子をかぶり、両手を上にして踊る男子像である。体部から台部までは刷毛による整形が施されており、足の表現はない。焼成は良好で、実に良く調和のとれた姿態である。歌舞を演じる楽人をかたちどったものと推定されており、当時の人々の風習、信仰等を知る上で貴重な資料である。出土地は五代町中原の小古墳で、6世紀後半頃の作と考えられる。

45. 奈良三彩小壺

市指定重要文化財　昭.61.10.30
大手町二丁目12―9　前橋市立図書館
器高5.3cm、口径4.3cm、底径4.7cm、最大径8cm
奈良時代

昭和56年に調査されていた上泉町桧峯遺跡の竪穴式住居跡より出土。他の出土遺物と一括で、昭和61年に市の重要文化財に指定された。

法量は器高5.3cm、口径4.3cm等で、胎土は柔かい淡黄白色の良質のものである。成形はロクロ水挽きを用い調整痕が顕著にみられる。器形は口径より底径が一まわり大きく安定している。釉は浅緑色の緑釉を基調に白釉、黄褐釉の三色を配色している。

この小壺は、中国の唐三彩の手法をうけついで、奈良時代に畿内周辺の窯で焼成されたと思われる。特定階層の祭器・奢侈品として用いられたと言われる奈良三彩が、地方村落の一住居跡から出土したのは本例のみである。

Ⅳ. 彫　　刻

十一面観世音像

仏像では阿弥陀如来坐像が、鉄という材質で鋳造され、かつ、紀年銘を有する点において全国的にみても貴重です。鉈(なた)彫の十一面観世音像も地方色を豊かに伝えています。納曽利面は銘文があり、優れた作品です。

46. 鉄造阿弥陀如来坐像

国指定重要文化財　昭. 3 . 8 .17
端気町337　善勝寺
高さ88cm、重さ88kg、鉄仏
鎌倉時代

阿弥陀仏のおさめる西方浄土に往生しようとする考えは、仏教の普及とともに伝えられていた。平安時代後期には、仏教も正法・像法の時代を経て、いよいよ末法の時代に入るという末法思想が普及し、極楽往生を願う考えとともに阿弥陀如来の信仰が急速にひろまっていった。

この仏像は、そうした時代を示すすぐれた鉄造仏である。背面に仁治四年（1243）僧心禅の大勧進により作られたという陽鋳の銘があり、製作の年代と経過がわかる。仏像の衣文は通肩で安定した姿をしている。頭部と手は青銅製である。顔は柔和な表情をしている。

47. 十一面観世音像

県指定重要文化財　昭.26. 6 .19
日輪寺町412　日輪寺
総高 1 m51.5cm、像高 1 m28.5cm、木像
平安時代

鉈彫の観音と言われているもので、頭頂より台座にいたるまで、桂材の一木造りの像である。かつては、光背があり、頭上は天蓋におおわれ多くの崇拝を受けてきた。

像容は台座の上に両足をそろえて直立し、右手は与願印、左手は施無畏印を結び、天衣は両肩から両足の前でU字形に垂れている。表面は顔料等装飾を加えず、丸ノミのあとが明瞭に残る。胸には朱と墨で素朴な胸飾りをえがく。眉、眼の上の線も墨書である。

平安時代後期の観音信仰の高まりを示す本像は、観音堂の中で民衆の苦しみを救う慈悲の相をたたえている。

※　鉈彫像……鉈で彫ったのではないが、のみ痕を残している像をいう。荒彫像ともいう。関東の武士団発生の社会的背景に合致した仏像であろうと考えられている。

48. 納曽利面

県指定重要文化財　昭.49.12.23
二之宮町886　二宮赤城神社
舞楽面　縦24cm、横19.8cm、木製
室町時代

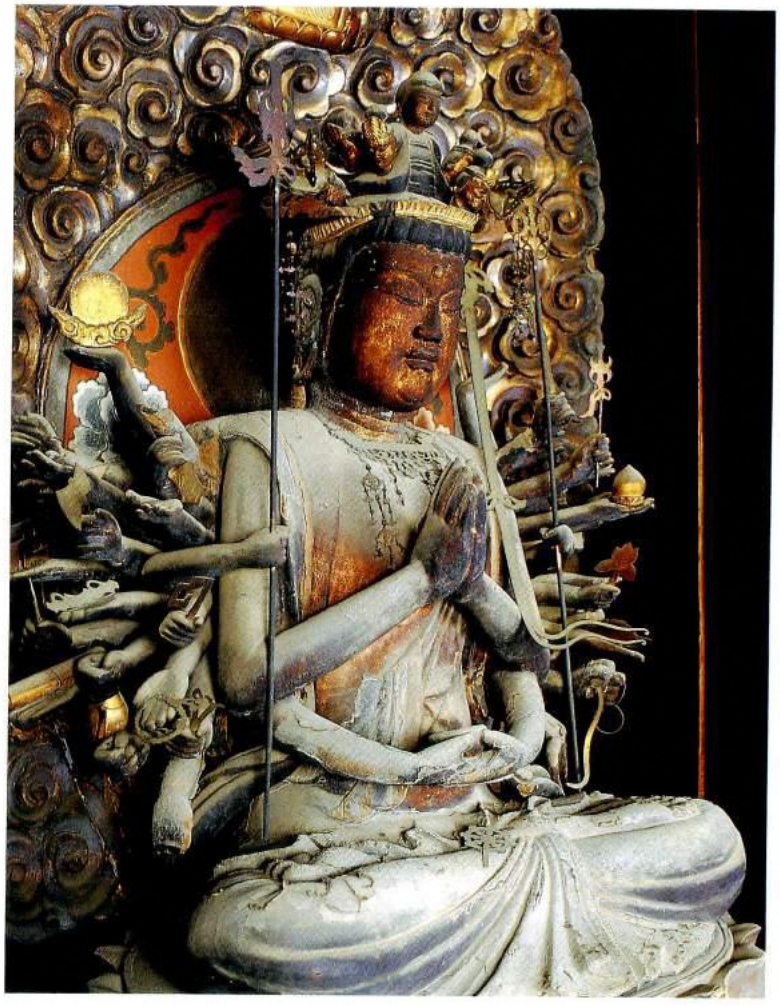
舞楽面であり、動眼と下顎は欠失している。舞楽とは、雅楽の音楽を伴奏に舞う舞のことで、大陸から伝わり、鎌倉時代には神社の神事と結びついていた。この二宮赤城神社でも「納曽利の舞」が祭礼の際、奉納されていたことが推定できる。裏面の縁には(右)「上野州勢多郡二宮□□神社」(左)「享徳二季癸酉林雄一口再興且那敬□」朱漆の銘があり、製作年代享徳2年（1453）が推定できる。

彫りの冴えた面で、形のとり方、顔面の波状文様、たくましい鼻のもりあげ方など無駄のない手法が見られる。木彫で表面が黒漆裏面には漆下地をほどこし、麻布をはり、乾漆の技法が施されている。

「仮面を外に出すと、上顎が、近江国(現滋賀県)の多賀神社にあるとされる下顎に逢いたくなって、雲を呼び大雨を降らせ、世の中が大いに荒れる」という言い伝えがある。

49. 慈照院千手観音坐像

市指定重要文化財　昭.50.12.24
二之宮町1811　慈照院
像高93cm、肩幅34cm、木像
鎌倉時代



慈照院の本堂は、二宮赤城神社境内にあった千手堂を移築、改造したものとされている。慈照院の本堂に安置されているこの千手観音像は、二宮赤城神社の本地仏と推定される。

木造で、頭頂部に化仏を備えている。像高は93cm、通肩で、肩が張り堂々とした体軀である。材質は、やわらかい桂材のようである。仏像全体に金箔が施されているが剝落して木地の見えているところが所々に見受けられる。しかし、この金箔は、補修の際に付けられたものらしく、原形は木地か胡粉の上に彩色した状態でないかと考えられる。木地には、細かい鉈目が見られ、鎌倉時代の製作と推定される。

50. 無量寿寺地蔵菩薩立像

市指定重要文化財　昭.50.12.24
二之宮町甲764　無量寿寺
像高１m84.5cm、肩幅55cm、木像
鎌倉時代

鎌倉時代になると衆生済度の地蔵菩薩を信仰することは、多く人々の願いとなった。無量寿寺の地蔵菩薩は、その頃の造立と考えられる。

この地蔵像は、右手に錫杖左手に宝珠を持ち、通肩の衣文が平行線を基調にしながら翻波式へ自然に移行し、みごとな美しさで整えられている。体軀は堂々として雄大な重量感があり、鎌倉時代の特徴を良く表現している。

寄木造りで、前面・背後・両脇からなるが、胎内銘は存在しない。頭部は後補と推定される。

この仏像は、十一面観音立像とともに江戸時代初期に、無量寿寺創建に際して招来されたものと考えられる。

※　寄木造り……仏像の頭部と胴部等をそれぞれ別の木でつくり、内部をくりぬいたあとで、矧ぎ合わせてつくる方法。

51. 無量寿寺十一面観音立像

市指定重要文化財　昭.50.12.24
二之宮町甲764　無量寿寺
像高71.5cm、肩幅13.5cm、木像
平安時代

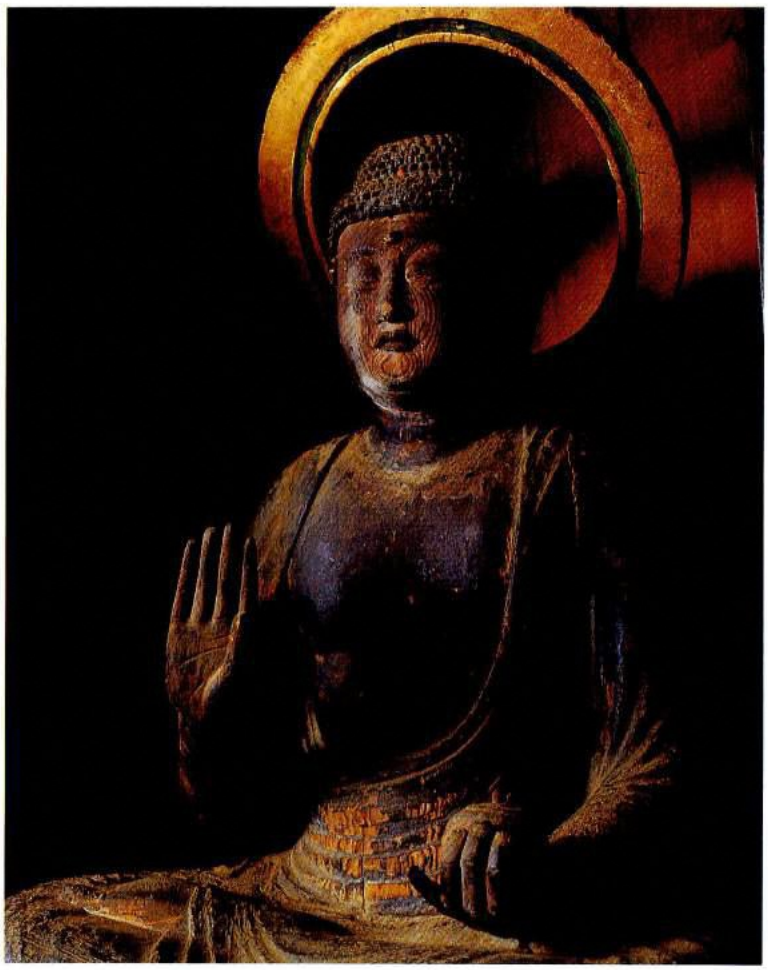
この仏像は、一木造りの観音像で、厨子に納められ、台座の上に直立している。

顔は長さと幅が等しい円形で、眉から鼻にかけての線はくっきりとし、目は細く口は比較的小さい。ほほにわずかにのみ痕が見られる。肩はなで肩で、腹がわずかに張っている。衣文には金箔がみられ、平安時代末期の作と考えられている。無量寿寺の創建に際して、護国寺（江戸新義真言宗豊山派大本山）から移されたものといわれている。

ひきしまった顔から、正統派の仏師の作と思われ、関東地方の美術・文化史上、貴重なものと考えられる。

52. 円満寺薬師如来坐像

市指定重要文化財　昭.60.3.27
後閑町383―1　円満寺
総高52cm、像高48cm、木像
鎌倉時代



医王山円融院円満寺は天台宗の寺で、中世豪族新田氏の氏寺長楽寺の末寺として鎌倉時代の草創を伝えている。

寺の本尊は桧の寄木造りで、円光背をもち、細やかな螺髪と肉髻が刻まれ、通肩の納衣は胸を広くあけ、しなやかな衣皺は平行線を基調としながらも実に写実的である。右手は施無畏印を結び、世俗と仏身との隔りをなくす慈悲深さを示し、左手には小型の薬壺を持つ。鎌倉時代の造立と推定される。

結跏趺座像でみごとな蓮肉・蓮弁の台座で受けられているが、敷茄子から下は、近世後補のものと思われる。

53. 円満寺石造阿弥陀三尊坐像

市指定重要文化財　昭.60.3.27
後閑町365　円満寺薬師堂
像高　左から65cm、93.5cm、71cm、石仏
鎌倉時代

円満寺の境内地の北境だったと思われる地に、「お薬師さま」と呼ばれ親しまれる三石三尊坐像の石仏のお堂がある。

角閃石安山岩を用いた半肉彫りの陽刻で、鎌倉時代後期の造りと見られ、県内でも数少ない石仏である。

石仏は三体で中尊は宝珠形に近い丸味の強い舟形状の光背に、上半身裸形・結跏座臥の阿弥陀如来である。印相は、上品と思われるが定かではない。脇侍二体は中尊より小型で、印相から見て、向って右が観音菩薩、左が勢至菩薩であると考えられる。薬師様として信仰されているが、薬師三尊でなく阿弥陀三尊と考えられる。三尊が、石仏三体として信仰されている例は少ない。

54. 石造地蔵菩薩坐像

市指定重要文化財　昭.63.8.3
総社町植野150　元景寺
総高69.5cm、像高38.5cm、石仏
室町時代

元景寺の本堂に向って左側に羽階権現の祠がある。その右手の石仏群の上部に、石造地蔵菩薩坐像が安置されている。

この石仏は、安山岩製の舟形像で、蓮華座と反花を刻んだ二重座の上に、左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、ふくよかな体軀をしている。おおらかな構図と丁寧な仕上げが特徴といえよう。

上部には地蔵菩薩を表す梵字「カ」の種子が刻まれている。左に応永28年（1421）の銘があり、銘文のあるものとしては市内で二番目に古いものである。同時代と推定される石仏には比較的銘文のないものが見られるが、本像はそうした石仏群の中で紀年銘がある仏像として研究の基準になりうると考えられる。

55. 小島田の阿弥陀如来坐像

市指定重要文化財　平.2.4.10
小島田町504　下田敬治
総高62.5cm、像高37.5cm　石仏
室町時代

坐像のある地元では薬師と呼んでいるが、像容と手印から阿弥陀如来と判断される。

この像は安山岩で造られ、一枚の布を身につける際、両方の肩に布をかけるいわゆる通肩で、半肉彫りにされていて、頭部は猪首状をしている。膝張りは小さく、衣の前が下がっていて、箱型の蓮座に蓮弁が線刻されている。

像の光背背面に彫られた紀年銘に、延徳5年（1493）とある。

来世を阿弥陀如来に託す念仏講が普及していたことを示す遺品である。

（銘文）

十　延　十　念　敬
月　徳
廿　五　人　佛　白
三　年
日　丑　葵　　修逆

56. 鳥羽の大日如来及び笠塔婆

市指定重要文化財　平.3.4.12
鳥羽町813　鳥羽町東部公民館
大日如来　高さ71cm、幅54.5cm
笠塔婆　高さ81.5cm、幅44.5cm
鎌倉時代

【大日如来座像】

舟形光背とともに一石で半肉彫りに彫り出されている大日如来坐像である。宝冠を付け、智拳印を結ぶ姿が表現されている。やや幅広の顔を持つ。鎌倉時代中期のものと推定されている。

石仏は大衆的な信仰の対象として広く民衆に親しまれてきたが、この時代の遺品は非常に少なく、これはその内の貴重な一体である。

【笠塔婆】

笠部分は欠損し、角閃石安山岩からなるほぞのない塔身部のみが残る。

正面の光背を形どった薬研彫りの枠の中に阿弥陀三尊坐像が彫り出されている。中尊は九品の定印を結ぶ阿弥陀如来坐像、右脇侍は左手に未開花蓮華を持ち、右手は降摩印になっている観音菩薩坐像、左脇侍は両手を合掌する勢至菩薩坐像である。鎌倉時代後期のものと推定されている。

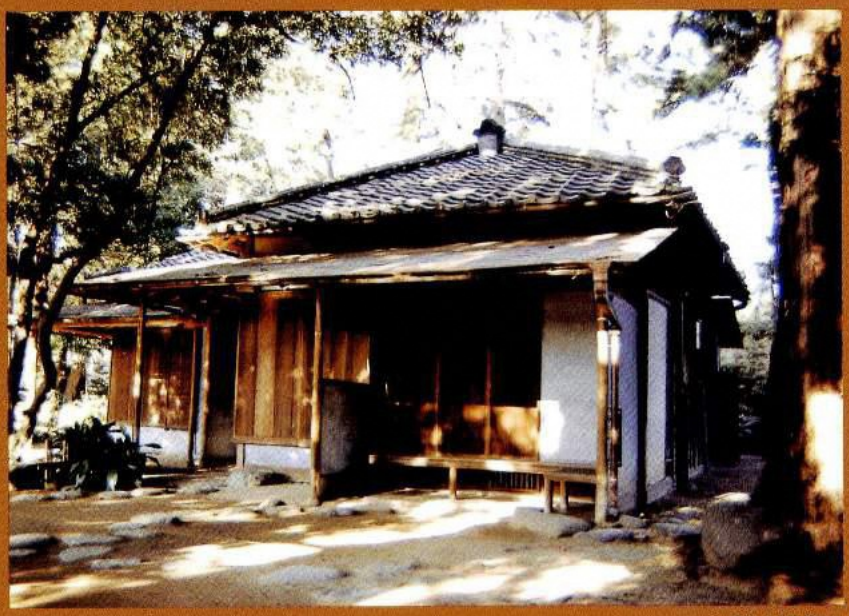
57. 石造観音菩薩坐像

市指定重要文化財　平.10.4.10
田口町309－2　柳沢　明
総高48.0m、像高30.0m　石仏
室町時代

この石仏は、一石の安山岩より造られた半肉彫りの観音菩薩坐像で、観音山古墳の墳頂に安置されている。像は二重の蓮華座に坐し、背に舟形の光背（光明を表す装飾）を負っている。像の両脇には紀年銘が刻まれ、応永20年（1413年）に造られたことが分かる。まだ光背には5つの種子（仏を表す梵字）が彫り込まれている。

像の鼻や目には一部欠損が認められるものの、全体に保存がよく、年号もあることから石仏研究の基準となるものである。また、観音菩薩は薬師如来と共に、乱世における現世利益（神仏より現世において受ける利益）を求める信仰の対象となったことから、当時の民衆信仰の様子を知る上でも貴重である。

V. 建造物



臨江閣茶室

総社神社本殿・アメリカンボード宣教師館・臨江閣等は建物自体が特徴的であるうえに、歴史的背景がそれぞれあり、価値を高めています。

また笠薬師塔婆・板碑・宝塔等の石造物に、時代の信仰を背景に形態・意匠に特徴あるものがあり、それが歴史的にも価値あるものとなっています。

58. 上野総社神社本殿

県指定重要文化財　昭.38.9.27
元総社町2377　総社神社
三間社流造
江戸時代

平安時代に上野国の神社549社を集めて祀ったのが総社神社である。その後永禄年間（1560年頃）に兵火を受け、西北1kmの位置から現在地に遷宮されたとの社伝がある。

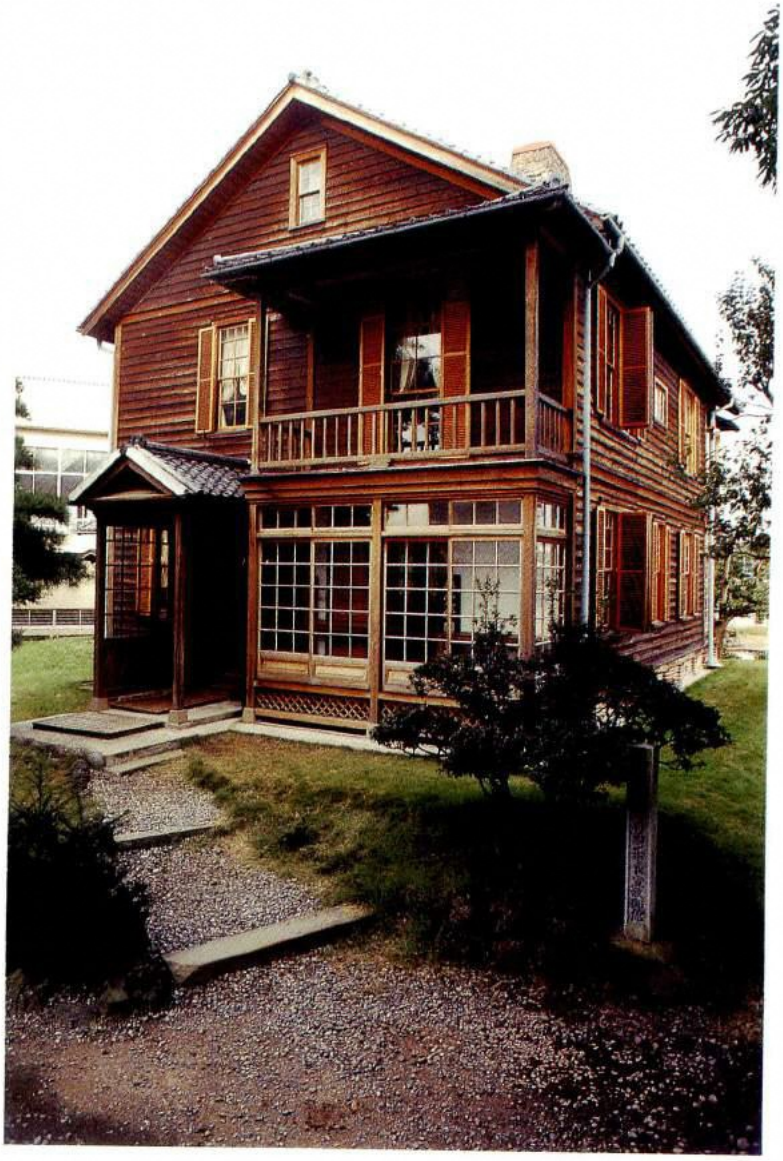
本殿は高さ90cmの基壇上に建ち、桁行三間、梁間二間の主屋に、桁行三間にわたって梁間一間の向拝が、つなぎ虹梁でつながれている木造柿葺の三間社流造である。この本殿は、唐様を基礎とした張の強い蟇股、組物、大幣束、伸びのある海老虹梁などに、優美な桃山風の特色をよく示している。

昭和59～61年に保存修理工事を実施し、華麗な創建当時の姿となった。

※　柿葺……屋根葺の一種。ヒノキ、サワラ、スギなどの柾目の割板（厚さ約3㎜）を重ねて葺く。この板を柿という。

59. 旧アメリカン・ボード宣教師館

県指定重要文化財　昭.53.10.13
小屋原町1120－5　共愛学園
木造２階建、延床面積150㎡
明治時代



この建物は、キリスト教の伝道団体であるアメリカン・ボード（米国伝道会社）の宣教師の住宅として、明治25年（1892）に建築された。当初は東西二つの西洋館があったが、現在残っているのは東館で、現存する県内唯一の洋風住宅建造物である。

建物はレンガを基礎にした木造２階建、バンガロー形式の洋風建築である。屋根は桟瓦葺で、小屋組には洋風建築の特色である頬杖（屋根を支えるための斜めの材）を用いている。内壁は柱の見えない大壁造りで、外壁は板張りであり、かつて朱色に塗られていた。窓は高く、椅子での生活に適した上下開閉式窓で、間取は廊下の両側に、暖炉のある部屋が並ぶ中廊下式となっている。

昭和57年に保存修理工事を行い、平成10年度～12年度にかけて、小屋原町の共愛学園地内に移転工事を行った。

※　桟瓦……本瓦葺の丸瓦と平瓦とが１枚に連続した形の波型の瓦。現代住宅などの瓦はこれである。

60. 旧蚕糸試験場事務棟(前橋市蚕糸記念館)

県指定重要文化財　昭.56.7.10
敷島町262　敷島公園ばら園
木造平屋建、延床面積275㎡
明治時代

この建物は、明治45年に落成した国立原蚕種製造所前橋支所事務棟を、敷島公園ばら園内に移築したものである。

建物の特徴としては、木造大壁造り、横箱目地板張り、エンタシス状の玄関の角柱、レンガ積みの基礎、唐草風の床下換気口、上下開閉式の窓、出入口のドアの低い取手、避雷針の設置、シャンデリアを下げた天井の飾り(通気孔をかねる)などがあげられる。建物は、明治期の代表的な洋風木造平屋の建造物であり、製糸業とともに歩んできた前橋の近代史を知るのに貴重な文化財である。

なお、館内は4部屋からなり、現在養蚕・製糸に関する用具・器械などが展示してあり一般公開されている。

61. 臨江閣本館・茶室

県指定重要文化財　昭.61.3.7
大手町三丁目15
本館　木造2階建、入母屋造、茶室　木造平屋建
明治時代

松林を背にして利根川の流れを臨む高台に臨江閣本館が建つ。この建物は、前橋市に貢献した楫取素彦県令や前橋市街の有志等の協力と募金により、明治17年に群馬県や前橋の迎賓館として完成した。創建当時の棟札をみると、臨江閣本館は90坪、付属家屋は16坪であることが分かる。建物は、和風木造建築の中の数寄屋風建築に含まれる。

茶室は、本館工事より2か月遅れて、明治17年11月に完成した。大工は、京都の宮大工今井源兵衛である。規模は21坪で、茶席は京間4畳半、本勝手、下座に床の間を持つ形式で、わびに徹した草庵茶室である。

これらの建物は、老朽化のため昭和62年度から全面的な保存修理工事が行われている。

62. 産泰神社本殿幣殿拝殿神門四棟及び境内地

県指定重要文化財　平.6.3.25
下大屋町569　産泰神社
江戸時代（建造物）

産泰神社は、巨岩を祀る自然信仰に始まり、その後、木花佐久夜毘売命を祭神としている。「荒砥の産泰さま」と呼ばれ、安産守護の神として広く信仰をあつめてきた。前橋藩主酒井氏の尊崇が厚かったことから、本殿などの主要な建造物は、前橋城を守護して西向きに建てられたという。

本殿、幣殿、拝殿、神門はいずれも江戸後期の建立になるが、建物を飾る各種の彫刻や天井絵は、時代の特徴をよく表している。4棟の建物は、本県の神社建築における建築様式の指標となる建造物として重要である。平成7～9年に、屋根を中心に保存修理工事が行われた。

63. 臨江閣別館・渡廊下

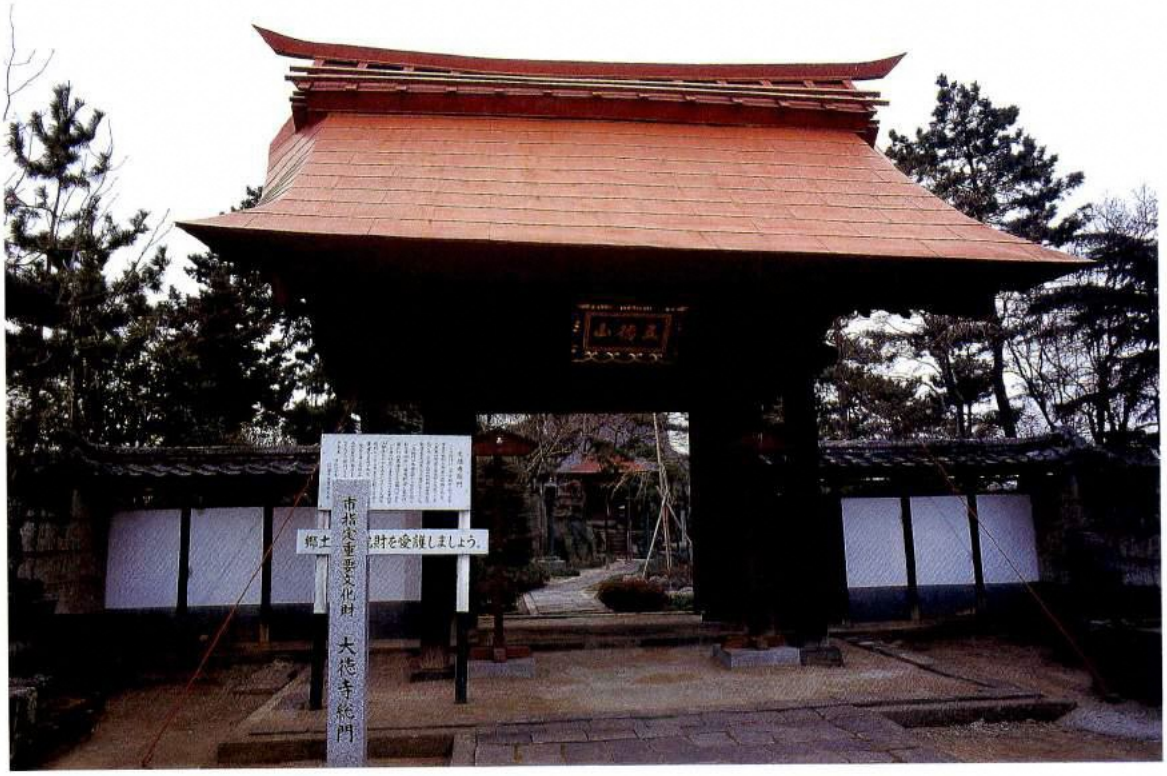
市指定重要文化財　昭.61.6.6
大手町三丁目15
別館　木造2階建、渡廊下　幅1.83m、長さ18.41m
明治時代

臨江閣別館は、明治43年、前橋市で開かれた一府十四県連合共進会の「貴賓館」として建てられた。木造2階建、入母屋造、玄関車寄付、桟瓦葺の書院風建築である。特徴としては、1階に西洋室（板床大広間）を含み、2階には、180畳敷の大広間がある。建築には、市内の小曽根甚八があたり、安中杉並木の巨木30本が使われている。棟札には、明治42年9月着手、同43年8月竣工と記されている。渡廊下は、明治43年7月着手し、本館の一部改修として施工されたものである。閉会後は市に引き渡され、大公会堂として利用された。

戦後は、市役所庁舎、中央公民館として昭和56年度まで使われ、現在も本館・茶室とともに社会教育施設として市民に利用されている。

64. 大徳寺総門

市指定重要文化財　昭.39.12.22
小相木町91　大徳寺
高さ約6m、本柱心々間約3.6m
江戸時代



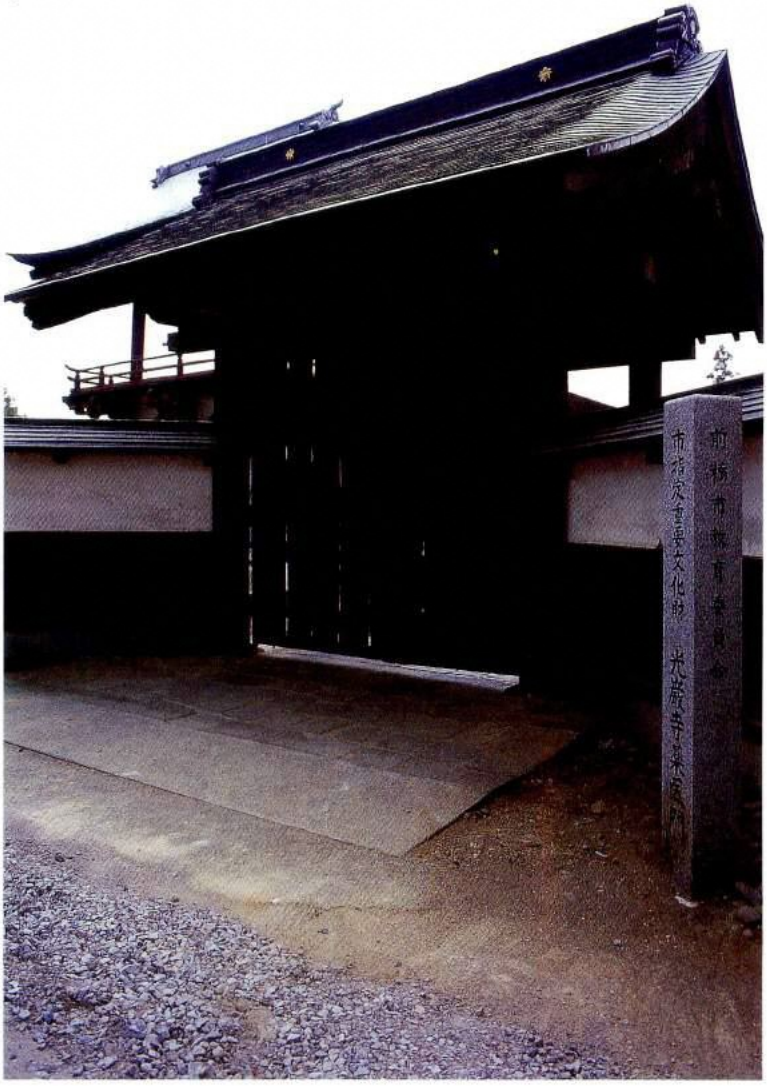
総門は東を向き、トタン葺単層の四脚門で、低い基壇の上に建っている。本柱1本と控柱2本の計3本を各南と北とに設置し、それぞれに頭貫をわたして軸部を構架している。各控柱の上部四か所には出三ツ斗を組み、それぞれ表と裏の丸桁を支えるとともに、本柱上部からの海老虹梁を支えている。本柱はさらに上に延びて、柱頭の三ツ斗組で化粧棟を受けている。この柱頭から海老虹梁がでている。

化粧棟および各丸桁と頭貫との間には蟇股がある。屋根裏はすべて化粧屋根裏で、全体的に均整のとれた美しい門である。

江戸時代中期、正徳2年（1712）の建立であり、棟梁は後家（現後家町）の田村八兵衛との伝承がある。

65. 光巌寺薬医門

市指定重要文化財　昭.50.12.24
総社町総社1607　光巌寺
高さ4.9m、本柱心々間3m
江戸時代



薬医門は、『門話集』（室町時代の書物）匠明に「裏門也」と記され、棟門の簡素な形であるとされている。

切妻破風造りの屋根を持つものとされ、本柱と控柱の上に男梁・女梁を渡し、3：7の位置に板蟇股を置き、それが棟木を支え、斗の肘木で丸桁を支えた重量配分の妙を見せた構造となっている。すなわち棟が本柱より後方へずれた形を示し、一般にこの特徴を薬医門であることの判断としている。

古建築の様式美を備えた簡素な門であり、板蟇股にのみ三巴・五三の桐・立ち沢瀉・剣片喰の紋が彫られている。特に、三巴は尾長巴として近世初期の特色を示している。また、本柱の下部には地貫の枘穴が残っている。

66. 旧関根家住宅

市指定重要文化財　昭.60.3.27
西大室町2510　大室公園内
木造茅葺2階建　延面積217㎡
江戸時代

関根順次氏が所有していた木造茅葺赤城型の民家で、赤城南麓の中規模養蚕農家を代表する建物である。

平面は不整形田字型で、表側の部屋は上手がコザ、下手がオモテザシキと称する八畳間である。コザの裏は六畳のヘヤで寝室として使われ、浅いトコとオシイレがある。下手は中央土間寄りにイロリを設け、居間として使用されていた。裏側上手寄りにトダナを造り付け、上段上手に仏壇を作っていた。オモテザシキの下手にアガリハナを備え、ダイドコと称する土間に続き、ダイドコの下手表側にウマヤを設け、ウマヤの上はウマヤニケエという穀物置場にしていた。ニケエは主に養蚕に利用された。尚、構造は扠首構造とし、四方下屋造りであり、幅四間に及ぶ開口部が屋根南面にある。

67. 総社神社拝殿

市指定重要文化財　平.5.4.16
元総社町2377　総社神社
入母屋造
江戸時代

拝殿は、文化12年から天保14年（1843）にかけて造られて入母屋造の建物で、屋根は千鳥破風の付いた銅板葺になっており、南側を向いて建っている。勾欄の擬宝珠には、天保3年9月吉日の銘が刻まれている。

関東地方の近世社寺建築の例に漏れず、向拝の海老虹梁、手挟などを彫刻化し、向拝の柱、壁面が彫刻で装飾されている。特に正面桟唐戸の浮彫り、側壁面の詩歌の鑿彫りなどは装飾性が高く、彫刻の少ない本殿の装飾を補うために意図されたものである。

また、脇障子の透彫りなどは写実的で、当時の大工（元総社の宮大工関谷出雲守）、彫刻師（熊谷の長谷川源四郎）の技術の高さを物語っている。

この建物は地方工匠の雄作で、彫刻にすぐれ、江戸時代後期の特徴をよく表している。

68. 廃覚動寺宝塔

市指定重要文化財　昭.39.12.22
公田町421　乗明院
高さ 2 m19cm
南北朝時代

この宝塔は、永和4年（1378）の銘が基台に陰刻され、その上に反花座が作り出され、さらに上の塔身には胎蔵界四仏が各面に薬研彫され、上に中台が乗る。これは宝篋印塔の裳越にあたる部位にあたり、上部は饅頭型と首部からなり、上に屋蓋が続き、屋蓋上部には露盤・伏鉢・反花と続く。その上は、請花と九輪の中程迄が現存する。多宝塔と宝篋印塔の中間形式の異型宝塔である。上州における仏教の多様性を考えさせるものであり、基礎には大勧進外100名余の法名が刻まれ、特に時衆聖などの用いた阿号が多い。

※　宝塔……多宝塔とともに「法華経」の所説に基づいて建立された。

69. 笠薬師塔婆

市指定重要文化財　昭.45. 2 .10
問屋町二丁目３－４　稲荷神社
高さ１m12cm、幅37cm
平安～鎌倉時代

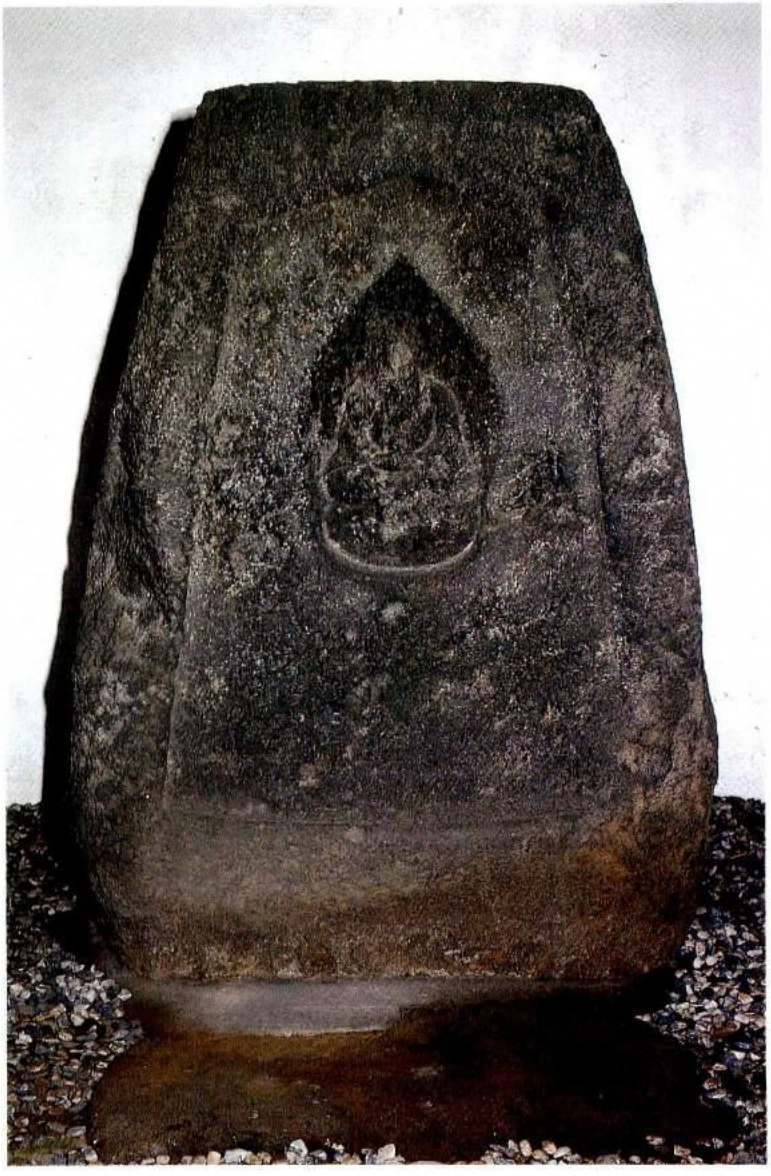
県内最古の様式をもつ笠塔婆である。笠石の屋根は寄棟本瓦葺を模し、重層表現の方形の線刻があり古様である。塔身には四面に二重火炎光背の中に薄肉で裸形坐像と台座が平面薄肉彫りで表現されている。像様は南方釈迦、東方薬師、北方弥勒、西方弥陀の顕教四仏を表す。

裸形で丸顔の四方仏、笠石の表現などから、平安時代末期から鎌倉時代初期に造立されたものと考えられる。

現在は、問屋町の丁間稲荷神社にあるが、北方約300mの位置から移設されたものである。

70. 小島田の供養碑

市指定重要文化財　昭.48.9.24
小島田町大門跡530
高さ1m29cm、上幅56cm、下幅1m、厚さ約50cm
鎌倉時代



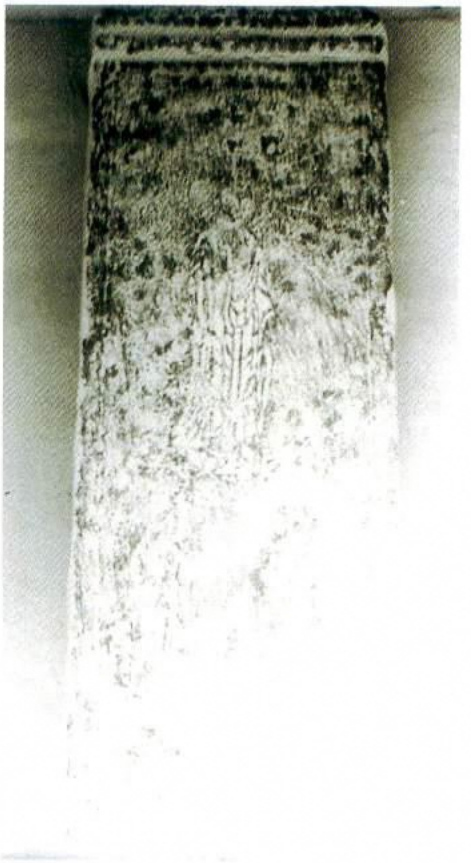
この石造物は、阿弥陀如来を表現したものでは県内最古の銘をもつ。

形状は台形で、表面に将棋駒形の彫り込みがあり、さらに中央上部に舟形光背と台座が45cm×27cmで彫り込まれ、阿弥陀如来坐像が刻まれている。右に観音菩薩の種子「サ」、左に勢至菩薩の種子「サク」が刻まれている。その下部には仁治元年（1240）に橘清重が、亡き子息の極楽往生を願う旨の銘文がある。

仏教が、鎮護国家から阿弥陀信仰により民衆済度に移行したことがうかがえる県内初期の遺物であり、板碑の祖形とされている。

71. 阿弥陀三尊画像板碑

市指定重要文化財　昭.48.9.24
公田町421　乗明院
高さ 1 m67cm
鎌倉時代



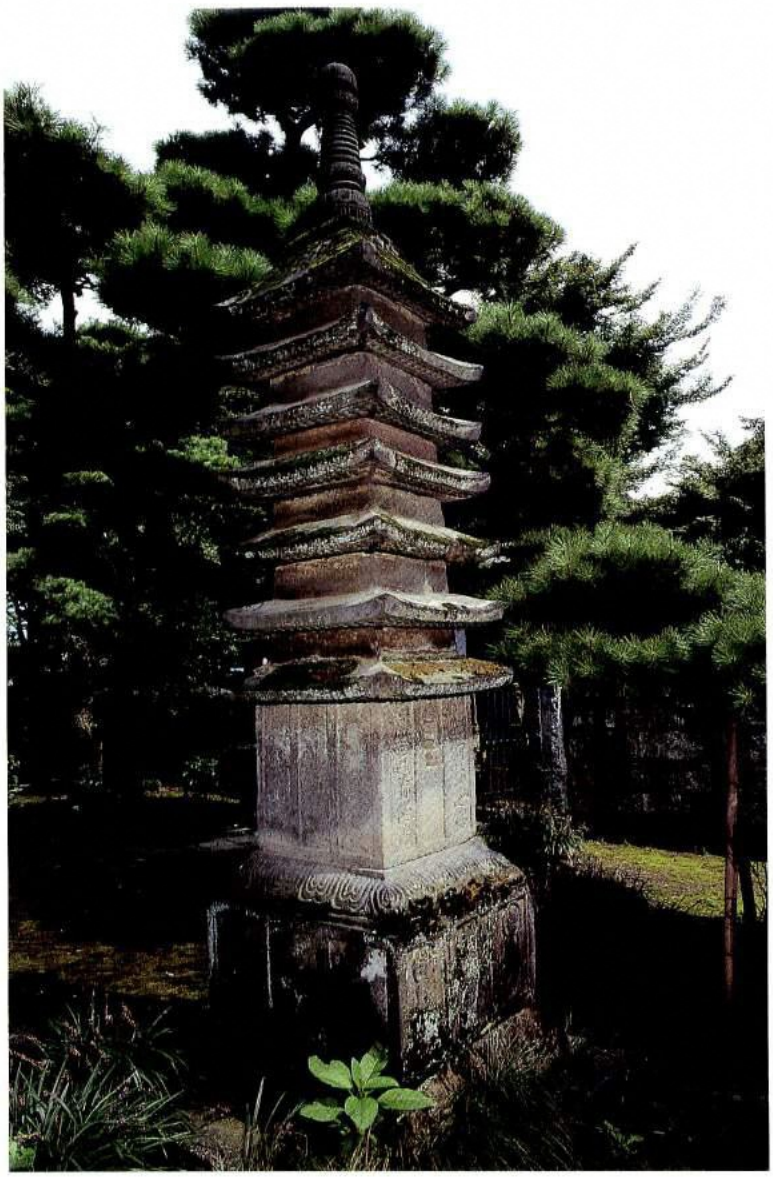
板碑は、五輪塔を頭部にあらわした板塔婆を原形とし、鎌倉時代の中期から桃山時代の間に、追善供養のためにつくられた。

この板碑は緑泥片岩製の完全な形のものでその表面には、阿弥陀三尊の来迎画像が流麗な線によって陰刻され、弘安3年(1280)の銘が確認されている。

緑泥片岩の板碑は前橋市域にも、現在約160件余が確認されているが、その多くは仏種子（梵字によって表現した仏）を蓮華座上にのせたものが圧倒的に多く、本例のように仏画を刻んだものは市内ではきわめて珍らしい。

72. 東覚寺層塔

市指定重要文化財　昭.48.9.24
総社町総社1607　光厳寺
高さ 4 m17cm
室町時代



この塔は、相輪、七層の屋蓋、塔身そして二段の基台からなっており、塔身の正面には「南無阿弥陀仏」と記されている。また、基台正面の中央区には格狭間の形をした孔と香炉、左右の両区には花瓶が彫ってある。更にその両面の各区にそれぞれ一体ずつ、併せて六体の観音像が刻まれている。これらの刻法は、基台上端の反花座と共に、室町時代の特色を示している。

なお、東覚寺は暦応元年(1338)銘の梵鐘（長野県南佐久郡臼田町上宮寺蔵）にも「上野国群馬郡高井郷東覚寺推鐘」と刻まれた寺で、高井町塔の腰(塔残し）付近にあったとされ、戦国時代に焼失したとされている。焼け残った塔はその後、光厳寺に寄進された。

73. 前橋藩刑場跡供養塔ならびに道しるべ

市指定重要文化財　昭.50.12.24
天川大島町290－5
供養塔　高さ3m91cm、道しるべ　高さ70cm、幅38cm
江戸時代

刑場跡供養塔は、天保12年（1841）町人68名の世話人により、刑死者の霊をとむらうために建てられた。塔は巨大なもので切石積の壇上に台座、蓮華座の上に2m17cmの塔身を乗せている。

天保期の凶作は生活全体に影響し社会不安も深刻であった。供養塔の塔身正面に「南無妙法蓮華経」と力強く刻まれた題目は時代を超えた民衆の心を感じさせる。

道しるべはほぼ楕円形の安山岩でできており、正面中央に「南無阿弥陀仏」、その右側に「宝暦五歳」（1755）、左側に「亥十月吉日」中央下「右江戸みち、左あ徒満道」とある。あ徒満道とは、東山道の名残りとも推定されている。